S O T O 禅 インターナショナル

発行日　2008年8月30日　　発行人　福島伸悦
編集責任者　淺井宣亮　　編集担当　黒田博志　太田賢孝
発行所　SOTO禅インターナショナル事務局　〒233-0012 神奈川県横浜市港南区上永谷5-1-3 貞昌院内
Tel. 045-843-8852　Fax. 045-843-8864　　URL: http://www.soto-zen.net/
郵便振替　00100-6-611195　SOTO禅インターナショナル

Vol.38

両大本山ワークショップ　永平寺／總持寺

CONTENTS

●巻頭　ととのえられし おのれ―佛主主義―　……大本山永平寺監院　大田　大穣　1
●特集①　ＳＺＩ創立15周年シンポジウム
基調講演「禅信仰と社会的実践」（抄録・前編）……駒澤大学名誉教授　奈良　康明　2
パネルディスカッション「世界の曹洞禅―禅の果たす役割」（抄録）……6
●海外レポート①海外の仏教についての雑感　―韓国の仏教と西洋仏教―……東北福祉大学 准教授　斉藤　仙邦　10
②前角老師による白梅会の系譜……白梅会会長　獅心ウィック　14
③カリフォルニア大学バークレー校　日本研究センター50周年記念大会に参加して……ＳＺＩ事務局員　黒田　博志　15
④大悲山普門寺・アイゼンブッフ禅センター「庭園開放デー」……ドイツ普門寺　中川　正壽　16
⑤中国西安・興教寺　玄奘三蔵紀念院瓦対入座レポート……ＳＺＩ事務局員　さとうのり　17
●特集②　ＳＺＩ創立15周年両大本山ワークショップ
「仏教東漸とハイブリッドジャパン―国際時代の日米仏教―」受講レポート……ＳＺＩ副会長　細川　正善　18
アンケート全文掲載……26
●国内レポート①キャンドルナイト2008 in 大船観音寺／映画『GATE』禁断の輪を閉じる祈りの旅……20
②災害たすけあい托鉢レポート……22
③『伝統の継承』～平成20年度聖護寺国際安居レポート～……ＳＺＩ事務局員　大谷　有為　24
④永平寺主催文化講演会（東京会場）開催……25
●SZI express　会費納入単・15周年寄付納入単・塔婆で植林事業納入単……31
動静報告・編集後記……32

巻　頭

ととのえられし おのれ
―佛主主義―

大本山永平寺監院　大田大穣（おおただいじょう）

釈迦牟尼仏のよるべとせよとされたのは、ととのえられしおのれということでした。

多数決も人間関係の整理という面ですぐれた方法であることは否めません。しかし、現代の情報社会で、大きな影響を与える操作によって誤った方向に導かれることなしとは申せません。

しかし、歴史上の数々の事例にみるまでもなく、独裁者、英雄とむしろ崇められた人々によって多くの人々の幸福が損なわれたことは、枚挙にいとまもないことです。

先人の言に「一人真を発すれば…」とあります。私たちは決して偶然にこの世に人間として生を享けたのではない。誓願を以て、その因によって、四苦八苦に満ちたこの娑婆世界に為すべきことのための尊いご縁を頂いたのです。自らの呼びかけに応じての職（beruf）である出家者の道を選んだのです。

家族も檀信徒もみな同志であります。仏教に無縁はありません。唯一絶対者を神と称するのではないのです。

絶対、絶対と固執するのではなく、いわば絶対的相対ともいうべき固縁生越の世界、人生観の中で、ありとあらゆる存在と、非存在とすら調和を計ってゆくのです。日常の瑣末のことに思われがちな一々の物事こそ、かけがえのない価値があります。「禅」が「全」であり「善」である所以です。摂取不捨、それこそ世界宗教としての「ＺＥＮ」でありえましょう。住み馴れた世界から一歩踏み出して、異文化の中に身を置いて、世界中の人々に天地人三才との調和の生き方こそと、人間のみ中心主義の弊を今こそ正すべきと身命を賭しておいでの姿に合掌いたします。

「ＳＺＩ」の前途がどれほど困難を増してゆくものであろうとも、大道は無門です。

特集①　ＳＺＩ創立15周年シンポジウム

基調講演「禅信仰と社会的実践」（抄録・前編）

駒澤大学名誉教授　奈良康明（ならやすあき）

2008年6月19日開催
於：東京グランドホテル　桜の間

世界に発展していく役割というものを曹洞禅というものが担っています。今までの曹洞禅の対外的な布教というものに対する反省と、今後の発展というものに対して、「禅信仰と社会的実践」というテーマを選ばせていただきました。

その理由は、私達曹洞宗の人間は一生懸命社会のために尽くして、やっています。ところが社会全体には「禅も含めて、仏教は社会的になにもやっていないのではないか」と批判があります。一体どうしてでしょう。この点をはっきりさせておきたいということです。

1．仏教信仰と社会～釈尊の宗教信仰と社会

数年前になりますが、インドのバンガロールにおいてバチカン主催で、仏教とキリスト教の対話の集会が開かれました。そこではかなりアカデミックな議論が行われました。アメリカからいらしたカトリックの先生が私に「仏教は社会的にあまり活動していないといわれるが、どういう理由なのか」と質問されました。これは、別に非難するとか批判するとかというものではなく、ごく普通の質問という感じでした。私としては「またか」という質問でした。果たして仏教は、非社会的な宗教なのでしょうか。答えはイエスでもありノーでもあると思います。例えば江戸時代、お寺は寺子屋を経営しており、今の小学校教育にあたるものを受け持っておりました。現代でも、保育所、幼稚園、各種施設を経営して社会に貢献しているお寺は少なくありません。社会福祉士、民生委員、保護司、教誨師、あるいは学校教員として社会で活躍している僧侶の方はたくさんいらっしゃいます。また、葬式仏教などと言われますが、葬祭も「社会的事業」です。このように色々な活動をしているのに、何故、非社会的と言われるのでしょうか。

私は二つ理由があると思います。一つは、僧侶の檀信徒を含めた社会の人々との人間関係が薄くなったということです。今までのお坊さんというものは、社会を出た人でありながら、社会の指導者として色々なかたちで社会に発言していました。しかし現在、社会的に影響力を持ち得るような人間関係を持つことが少なくなってきている。人間関係が薄くなっていることが一つの理由だと思います。

基調講演　奈良康明先生

もう一つの理由は、戦争、平和、貧困、人権といった各時代の具体的な諸問題に対する関心と対応が貧弱であったということです。これは歴史的に否定できないことです。少し分類方法に問題があるかもしれませんが、仮に宗教を「個人的救済」と「社会的救済」に分けるのであれば、仏教が「社会的救済」にはほぼ目を閉じてきたということは、率直に認めなければならない問題であると思います。

私は「自我的自己」という言葉を時々使います。これは通訳するのに難しい言葉です。私達が日常に私と言っている存在はすべて、自我的、エゴ的にものを考え発想していく自我の働きである「はからい」によって色々なレッテルを貼り付けます。私は偉いとか、偉くないとか、鈴木ですとか、なんとかですとか、あなたはどうだとか、色々なレッテルを貼り合って、私という存在が社会的存在としてまかり通っています。それを自我的自己と私は言うのですが、通訳の方も訳に困っていると思いますので（同時通訳中です・・編集部注）、「はからいセルフ」というように申し上げたいと思います。

私たちが使う、私、俺、あなた、君などというのは「はからいセルフ」の上の話でしかありません。「はからいセルフ」というのは、自我を振り回し真実をまげます。ろくな事にならないので、思い通りにならないという苦しみが出てま

いります。縁起とか、無常とか、空などとよばれている真実、法というものを、自我的自己、はからいセルフがまげますので、思い通りにならない苦に悩む存在になる。

ですからはからいセルフを抑制して、真実に生かされている本当の自己実現をしようというのが、お釈迦様の教えだろうと思います。釈尊は、自己の鎧を壊せ、つまり自己を捨てよなどとおっしゃっております。これは、自己を捨てたら人間存在として意味が無くなってしまう、という意味ではなく、お釈迦様が言う自己を捨てろというのは「自我的自己を捨てよ」というように理解すべきです。

道元禅師の「仏道をならふといふは、自己をならふなり。自己をならふといふは、自己をわするるなり。」における、忘れる自己というのも、自我的自己、はからいセルフであると私は理解しております。はからいセルフを乗り越えていくところに、悟りがあります。それに基づいた心の平和の生き方があります。ですから、どうしても仏教は個人的救済が主となる宗教であると言わざるを得ないと思います。

この限りでは、仏教は社会とはあまり関わりのない宗教であり、この辺は、例えばキリスト教あたりとの違いがあると思います。私はキリスト教はよく分かりませんが、教えていただいたところによると、キリスト教というのは「我々」(we)という複数で、つまりみんなで神の国を造っていこうということが、信仰の基本になる宗教だと承っております。「我々」というものが主語になる限り、どうしてもそこに人間関係、社会的存在、具体的には愛という要素が非常に重要なものになり、社会的要素が強くなってくるものでありましょう。

ですから、仏教は建て前からも、歴史的にも個人的救済を第一義とする宗教であると言って良いと思います。ただ、だからといって、仏教は非社会的な宗教なのだ、社会的関心はどうでも良いのだとしてしまうことが出来るのでしょうか。微妙な答え方をさせていただきますが、ここでも答えはイエスとノーの両方あると思います。仏教、そして禅の「はからいセルフ」を乗り越えた本当の自己を見いだしていくという「自己の探求」は、仏教、禅の大きな特色で、今後の教化の目玉であります。

しかし、現代の私達が生きている時代は、お釈迦様の時代とは違っています。中国、日本の今までの歴史、時代とは違っております。そして、私達は現代に生きている人間であって、私達は仏教が非社会的宗教であるということに留まっていることは出来ない。これが、私が申し上げていきたいことです。

2．禅信仰と社会～道元禅師の信仰と社会

そこで今度は、「禅信仰と社会」ということを取り上げることにします。今、お釈迦様のことを中心に申し上げましたので、道元禅師の方はどうなんだということを申し上げてみたいと思います。道元禅師が自己を厳しく追及されていった方であるということは、言うまでもありません。先ほども少し申し上げましたが「自己をならふ・・・わするるなり。自己をわするるといふは、万法に証せらるるなり」。有名な『正法眼蔵』現成公案の一節です。つまり仏道とは、先ほど申し上げた自我的自己、俺だ私だと言っている自分、「はからいセルフ」、それをその下にあって支えている大きな自己である、宇宙的な真実であり、いのちと言っても良いです。

自我的自己を下にあって支えている真実を、どのように受け止めていったらよいのかということは、“只管打坐・証上の修”という二つのキーワードでいえると思います。非常に割り切りすぎるぐらいに割り切って申し上げると、只管打坐というのは仏法、無我の世界へ身を投じていくことであります。証上の修と道元禅師がおっしゃるときの修というのは、只管打坐とその延長としての僧院生活、坐禅を中心とした真実に即して生きる人生、といって良いと思います。これは修行なのですが、実はそうした修行そのものが真実そのものを証明し、実現させ、働かせていく行為そのものなのだということです。修行して証、悟りをみるというのではなく、逆に、真実を我が身に働かせていくということが、正しい坐禅を中心とした生きるという生活そのものでなければならない。そこまでおっしゃるわけであります。

こうした生き方は、そのものとしてはあまり社会とは関係がございません。そして、道元禅師はご存じのように、例えば『正法眼蔵随聞記』におきましても、「出家して仏道を学びたいけれども、介護しなければならならない両親がいる。両親を見送ってから出家して修行に入りたい。」と言った人に対して、道元禅師は「そんなことをしたら、いつ出家できるか分からない。年老いた両親を介護するのは、一時の親孝行かもしれないけれど、仏道を修行するということにはもっともっと大きな意味がある。自分の息子が自分達を介

基調講演　会場

護しないで、そうした意味のある修行に飛び込んだということは、年老いた両親も、喜んでそれを認めてくださるであろう。」と、現代ではとても通用しない言い方をおっしゃっております。ある意味、むしろ社会の在り方よりも、悟りの生活を非常に重要視するという姿勢です。晩年になって道元禅師が、不離叢林とおっしゃって修行に専念することを教えたということも有名なことです。

そうした道元禅師の社会に対する姿勢があると同時に、実は道元禅師は社会に対する関心を失っていたのでは全くないのです。例えば、栄西禅師のエピソードに“お寺に仏像の光背を作ろうと思って寄付をしていただいた銅があった。しかし、食べるものがない飢えた親子が来たときに、その銅を与えてしまった。「仏様のものを作る資材をあげてしまうとはなんだ」と言われたところ、栄西禅師は「どっちが大切か。人を救う方が大切だ。」と答えられた。”というものがあり、道元禅師はこうした心というものをよく見ろ、大事にしなければならない、と誉めておられる。

あるいは「『正法眼蔵』四摂法」という一章をさいて、社会的な布施というものを縦横無尽に説かれているという面もあります。決して社会的に尽くすということを、道元禅師は否定しているわけでもありません。ただ、道元禅師の当時の置かれた状況、考え方の中で、表面的には人材を教育し、自己というものを見つめていく方面に力点が置かれたように見えますが、決して社会的な関心を失っているわけではない。

一体どう考えたら良いでしょうか。自未得度先度他という言葉を検討してみたいと思います。十二巻本『正法眼蔵』「発菩提心」巻を少し引用します。

「衆生を利益すというは、衆生をして自未得度先度他のこころをおこさしむるなり。自未得度先度他のこころをおこせるちからによりて、われ、ほとけにならん、とおもふべからず。たとい、ほとけになるべき功徳熟して円満すべしといふとも、なおめぐらして、衆生の成仏得道に回向するなり。」

つまり、菩提心をおこすということは、修行のためになるということは、自分がまだ悟りにわたっていないのに他人をわたそうとする心をおこさせようとすることだ、というのです。そうした大きな宗教的な力によって功徳が積めますが、私が仏になると思ってはならない。たとえ、仏になる功徳が熟し十分に身に付いたとしても、なお、その功徳を他人に回し与えて（回向）、すべての人が成仏・得道するように願うのである、と。衆生を利益するということは、衆生の成仏・得道、要するに宗教的修行の道に入らせる、導くことなのだとおっしゃいます。

ところが、今読んだ文章に続いて、こんなこともおっしゃいます。「真実を求める心つまり菩提心は自利利他を超えた利行であり、一たびこの心を起こせば、その人の宗教的自覚と行動の上に、如何なる行為も、如何なる事物も、真実を働かせているものとなる。布施行などもその一例である。そこにこそ、意識して“仏道をならう”自己があるし、仏として行為し続ける主体性がある。ここには利他行が個人的なものか社会的なものか、などということは問題にならない。すべての行為が真実を求める心（菩提心）の働きである。」

つまり、成仏・得道に回向するのが利他行だと言いながら、そこに布施といったような社会的脈絡の意味を持つ言葉も入れておられる。そうしたことを意識して仏道を習う自己があるわけで、仏として行為し続ける主体がここにある。ですからここでは、自利か利他かという二者択一的な、相対的な自利利他は問題になっていないのです。だからこそ、今読みました文の少し前に、道元禅師は「おほよそ菩提心は、いかがして一切衆生をして菩提心をおこさしめ、仏道に引導せましと、ひまなく三業にいとなむなり。いたづらに世間の欲楽をあたふるを利益衆生とするにはあらず。」とおっしゃっております。

話が脇道にそれるかもしれませんが、実は、人権関係の方と議論をしておりました折に、そちらの運動体の方が、道元禅師のこの例を引かれまして「道元禅師も言われているではないか。自未得度先度他、自らを悟りに向かわせる以前に、他人を救わなければならない。だから、仏教の出家者、僧侶は必ずや100パーセント他を救う、すなわち、社会的事業に邁進しなければならない。」とおっしゃいました。このような理解で、私と議論されたことがございます。

しかし、自未得度先度他というのは、必ずしも他人に社会的利益を与えるということにはなっておりません。といっても、それを否定はされておりません。ですから、道元禅師は布施を始めとする社会的行為をも、菩提心の働きだというのですが、道元禅師におきましては、悟り・菩提というものを求めて、厳しく修行して生きていくことが、仏道を行ずる事である。それが他ならぬ利他行、自利利他両方に繋がることであります。相対的な意味の利他行というよりは、そうした信仰者として生きていく。

仏教の言葉で「一箇半箇の接得」などという言葉がございます。一人ひとりの修行者が、社会的に何かするのではなく身の回りから地道なかたちで自分の生活の中から影響を与えながら、他人を教化して仏道に入れていく。そうした利他行というものもあるわけです。同時に、積極的に社会的な活動に飛び込んでいくのも、また利他行。道元禅師はどちらでなければならない、ということはおっしゃっていない。そうしたものを下にあって支えるものとして、自未得度先度他というひとつの修行を教えておられます。ですから私

は、信仰というものを深める、慈悲心というものを深めていく、そして仏法に誠実に、そして信仰者としての自己に誠実に生きている限り、禅の人間として主体的な生き方は完結していると考えております。

と申し上げながら、また話が戻ります。歴史的には、禅の伝承は社会的な方への動きが非常に希薄であったことは、否定できません。そして、現在の私どもにどんな問題があるかと申しますと、浄土真宗は除きますが、曹洞宗を始め日本の宗教教団は出家教団を標榜しております。在家の信者さん方には関係のない問題かもしれません。しかし、私ども教団の内部にいる人間にとりましては問題です。出家教団を標榜する教団に属する僧侶でありながら、現実の生活は決して出家ではありません。

出家というのは、インドではもっと厳しく、家を出るということは、文字通り、屋根のあるところで寝ないことが沙門、出家でありました。完全に社会を出た人であります。中国、日本においては、そんなことはありません。でも、社会的には坊さんは、社会を出た人である。社会には直接関わっていないのだという、一般的理解があります。しかし現代となりますと、そのままでは通用しないだろうと思います。私どもは僧侶、出家者といいながら結婚をしておりますし、屋根のあるところに寝ているのは当然のこととして、世俗の生活をしているわけです。そうなりますと、現代の僧侶とはなんなのだと、現代の出家者とはなんなのだと、現代の出家制ということが問われなければならない。

実はこの問題に関しましては、曹洞宗の総合仏教センターで現代における出家とは何か、ということを主たるテーマとしながら、総合研究を続けております。3月にその成果が出ました。

現代の僧侶というものは社会内存在であるということはどうしても無視できません。今日の社会状況は、脱俗、社会から出た宗教者の存在を許しません。私たちは僧侶としても、教団という立場においても、社会内存在であるとはっきりしております。そして、その生活の有り様は、世俗的生活であります。新しい出家の意味を模索しなければなりません。社会内存在であるだけに、宗教者として社会に対して、それなりの責任があります。昔のインドとか、歴史的な中国、かつての日本では、お坊さんは社会を出た人でありますから、お坊さんの社会的責任を問うなどということはありませんでした。しかし現代では、そうした意味の脱社会の坊さんではないのであります。私どもは、宗教者としての、仏教者、禅者としての社会的責任は如何と問われなければならない、そして問われている問題であろうと思います。そうした時、個人的救済だけで良いのかということが問題となります。

お釈迦様以来、仏教の伝承というのは、どちらかというと人々の個人的な悩みに対応してきました。非常に大きな救いを与えてきました。そして、今後ともその救いというものは続けていかなければなりません。それと同時に、そうした歴史的伝承というものは、釈尊の宗教信仰というものは老病死という個人の自我に関わる、「はからいセルフ」に関わる問題であるだけに、個人の問題に大きく関わってくるということは、無理無いところでしょう。だが同時に、現実に社会を出た人であるということから、あまり社会的に関わらないで済んできたということもあります。

しかし、今日の私どもは、社会内僧侶というものの在り方を考えたときに、今後の僧侶の在り方、仏教教団の在り方というものを考えたときに、一つの歴史的認識として、社会に対する働きかけの歴史と、今後の問題を検討し、反省すべきものは反省すべきだろうと思います。教団のレベルでも、個人の僧侶の立場からも社会に対してどう働きかけていくかということを考え、具体的な実践の道を探る必要があると思います。その意味で私達教団の者は、ひたすら坐禅さえしていれば良い、解脱と個人倫理のみを説いておれば良いのだという、旧来の出家のイメージに隠れることがあってはならない。社会状況への関心を高め、出家に新しい意味と実践を加え、現代化することが要請されています。

繰り返し申し上げますが、仏教そして禅の本義は、内なる自己に向かって、真の自己を問い続ける。真実の自己を実現していくという本義がある。これはもう当然として、押さえていかなければならない。その上に、他者に対しては個人的な心の救済をしていかなければならないと同時に、社会的な関心を持つ。といっても、すべてのことを出来るわけではありません。私達信仰者のひとりひとりが、それぞれの立場において社会に色々な関心を持ちながら、それに対応して生きていく。そうした、社会に対する関心は必要だと思います。

（前編）

第２部　パネルディスカッション

パネルディスカッション「世界の曹洞禅―禅の果たす役割」（抄録）

シンポジウム発表者

オコナー洞燃師

パネリスト　オコナー洞燃師

こんにちは。私はシンポジウムに招待されたことを、きわめて光栄に思っています。

最近、曹洞宗の組織図を見ましたが、曹洞宗布教師会、曹洞宗保護司会、および社会福祉施設を監督する部門がありました。聴衆の皆さんが専門的な資格を持つためにこれらの領域を学ぶことを、強くお勧めします。

しかしながら、今日は専門的に組織化された活動ではなく、住職個人と個々の寺が行うことができる内容に関してお話しするつもりです。

私たちは基礎として道元禅師の教えを教えます。「同事といふは、不違なり。自にも不違なり、他にも不違なり。」「同事をしるとき、自他一如なり。」（『正法眼蔵』「菩提薩埵四摂法」巻）

私が、米国の刑務所、カウンセリング、ホームレスのための礼拝堂などで仕事しているとき、「Everyone Matters」のレポートをシンポジウムに提出しました。それを要約すると、以下の通りになります。

1）地域のニーズを特定し、すぐにそれらに応じます。
2）相手を尊敬し、真に必要としているものを何であるかを学びます。推量をしないでください。
3）必要とされていることは無数にあります。楽しみながら行うことが大切です。
4）時間をかけたからといって、「成功した」と考えないで下さい。菩薩は見返りを全く必要としません。

米国の、深い憂慮すべき状況をお話しさせていただきます。米国は世界のいかなる他の国よりも、さらに多くの数の人々を収監しています。米国には、世界の人口の5%未満しかいませんが、世界の受刑者のおよそ25%を収監しています。また、受刑者の総数がただ多いだけではなく、比率も世界一高いです。1%のアメリカ人は連邦か、各地方の刑務所の中で暮らします。

米国の多くの曹洞宗の禅センターが、説法と思索という形で、この膨大な刑務所人口の心のサポートを提供しています。これに、他の仏教徒が加わります。Prison Dharma Network（PDN）のウェブサイトをご紹介します［http://www.prisondharmanetwork.org/］。このPDNは2,500人以上のメンバーがいて、毎年3,000人以上の囚人をサポートしています。

しかし、このように、数を述べますと、いわゆる「成功」の目標を設定するように思われるかもしれませんが、こういう活動の場合「成功」を定義するのがきわめて難しいわけです。どのようにすれば、心における変化を定量化できるのでしょうか？

受刑者が、獄中生活の向上をもたらす一種のサクセスストーリーであるかもしれません。

ミルウォーキー禅センターに現存するプログラムをご紹介します。

今日、6人の教誨師が80～90人の受刑者のために、10のウィスコンシン布教所の中で説法しています。きっかけは、私が1998年に受刑者から受け取った仏教に関する質問の手紙でした。「私に会ってくれるでしょうか」という深刻なものでした。直接刑務所を訪れることなど、一度も考えたことはありませんでしたが、かなりの熟慮をして実行しました。

そして、その1人の受刑者に対する指導訪問が、数人の受刑者への指導訪問になり、何カ月もかかりましたが、刑務所の運営側は、私の誠意と熱心さを計り、ミーティングを重ねて、結局私たちが坐禅が出来るスペースを提供してくれました。

刑務所の運営側から承認を得るには、すべての秘密保持規定に従うと約束し、信頼してもらえなければなりません。多くの場合、想像以上に、困難ですが、忍耐こそが成功を招きます。また、受刑者だけではなく、刑務所のスタッフに対しても同様に敬意を表さねばなりません。

これらのプログラムは、当初、方法が分からなかったのですが、時間が経つにつれて、坐禅から始めなければならないとわかりました。また、時間があれば、経行をします。私が特に刑務所のために工夫したサービスですが、我々にはラオスとカンボジアから来た南方仏教のサンガのメンバーがいるので、彼らが禅以外の仏教を教えます。そうすることで、「衆生無辺誓願度」が実現可能なのです。

また、ほとんどの参加者が熱心な読書家です。ミルウォーキーの禅のセンターは仏教に関する無料の本を提供しています。次に、通常、短い法話を読み、議論を行います。道元禅師・瑩山

同時通訳も身振り手振りが

禅師、古い中国禅の祖師の文章などを使います。

このサービスに参加した受刑者が他の刑務所に移送されたとき、我々のプログラムが口づてに広まりました。多くの刑務所で、同じプロセスを用いました。私の仕事が知られるようになったとき、他の団体からプレゼンテーションを行うように頼まれて、Corrections Religious Practices Advisory Committee（RPAC）のウィスコンシンのメンバーになるように誘われました。RPACのメンバーは多くの宗教の信者を含みますが、数年間で私たちは確実に州の刑務所システムの宗教的実践の規則に影響を与えました。

この仕事を行うときに重要なことは、約束を守ることです。また、彼らにとって、変化が可能であるという、無常に関する仏説は非常に重要です。

さらに、私たちは外の世界につながるように、刑務所の壁の外で起きている様々なことを受刑者に紹介します。これは、受刑者が、忘れてしまう世間感覚の度合いを減少させる機会を提供します。注目に値するのは、原子爆弾投下の60年目に懺悔と平和のサインとして、「平和の地蔵プロジェクト」へ、私たちのウィスコンシン刑務所サンガが参加したことでした。わずか50人の受刑者が地蔵菩薩に対する1,500の地蔵菩薩を提供しました。私たちはミルウォーキー禅センターの四半期ごとに発行されるニュースレターや、同様の刊行物により、自己表現の機会を提供できます。

このような刑務所の中の仕事に加えて、ホスピスでの仕事もしています。禅センターのメンバーがホスピス・ケアの教育を受けたり、一般的なホスピス組織と共にサービスを提供しています。

カウンセリングでは、配慮をしている２つの領域があります。

それは、学生－教師のコンテキストの中で用いられる独参と、西洋の心理学的な治療法のテクニックを使用したカウンセリングという両者です。両者の関係については、かなりの議論があります。認可されたセラピストである何人かの曹洞宗侶が、２つの活動は厳密に別々に保たれるべきであると感じています。

他の宗侶は、２つの活動がお互いに効果を発揮できると感じています。

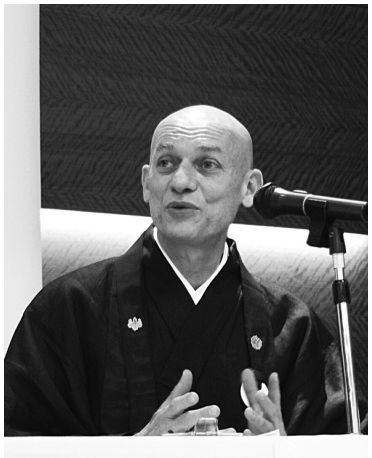
そして、私たちが、仏法を提供する前に考えなければならないことがあります。まず、飢餓があります。そして、家のない人がいます。それぞれの禅センターはこれらの問題に応じています。多くのサンガのメンバーは、食事を提供してくれます。他の者はホームレスのための共同体避難所で働いています。そして、多くが地方の炊き出しに参加します。いくつかのセンターでは、歯磨きやカミソリの使い方を教えたり、暖かい衣類や石鹸などの基本的な生活必需品のバッグを路上で生活する人に分配しています。他にも、有機菜園から生鮮食品を寄付する者もいます。

米国での曹洞宗侶による社会厚生福祉仕事の１つの特性は、他の政府機関や、世俗的な共同体と共に行われることです。宗教が異なる者と共に行うことで、様々な事業がとても有効に進められます。

最後になりましたが、私は再び道元禅師の教えを述べたいと思います。それは、「人界に同ずるをもてしりぬ、同余界なるべし。同事をしるとき、自他一如なり。」（「菩提薩埵四摂法」巻）ということです。

シンポジウム発表者

ビッチ大樹師



パネリスト　ビッチ大樹師

私は1953年に誕生しました。今から思えば、子どもの頃より宗教生活にあこがれる少年でした。エスピリットサント州の州都ヴィトリアの名門サレジアノ高校を卒業後、ポルトガル政府奨学生としてポルトガルの大学に進学、医学を学びました。しかし、医学では真に人は救えないと悟り、大学中退。政治家である父親の勧めでブラジルの地元大学に再入学、法律の勉強を始めました。しかしやはり、法律でも共に人を救うことは出来ない、と感じ２年生で中退してしまいました。

それから、しばらく放浪の旅に出ました。

禅と出会ったのはメキシコを旅している時です。ブラジルに帰国して、友人からサンパウロでも坐禅会があることを知り、さっそく仏心寺で行われていた坐禅会に通い始めました。

それから２年後、新宮良範南米総監から得度を受け、「大樹」と命名され、正式な曹洞宗宗侶になりました。

その報告を両親にしたところ両親は困惑。特に母親は、「得体の知れない宗教に息子が入ってしまった」、と泣き叫び、「絶対止めてくれ！」と懇請したものです。

故郷近くでの坐禅道場建設を夢見、私は同志たちと共に坐禅道場に相応しい場所を探しました。現在地ヴァルゲム山（Morro Da Vargem）は、故郷アラクルースの隣の市に位直し、山上の噴火口跡には水が豊富にあり、また畑があり自給自足の生活が可能であると判断して決めました。

父親に遺産の前倒しをお願いし、一山100haを買ってもらい、そのまま総監部に寄付しました。

師匠の新宮総監とはよく坐禅道場建設の夢を語りました。別院在住の開教師徳田良探師の指導の下、自給自足の修行生活が始まりました。ここでの生活が４年程経過した頃、新宮総監から日本での正式な修行を命じられました。

1977年の春、日本に来ました。当初は永平寺東京別院で日本語学校に通いながらの修行です。監院さんは後に永平寺七十七世となる丹羽廉芳老師でした。

ここには１年10ヵ月居ました。師匠の命令で、次に愛媛県瑞応寺僧堂に行くことになりました。

堂長は楢崎一光老師、堂監は楢崎通元老師です。２年目の冬安居では首座を勤めました。私は堂長老師の不離叢林の考え方に感銘し、理に適った瑞応寺での生活システムをそのままブ

会場からの質問

ラジルに移植したい、と考えるようになりました。

瑞応寺での修行は4年間でした、師匠よりブラジルへの帰国を命じられたのです。故郷に帰ったものの、ヴァルゲム山は以前にも増して荒れていました。また一からのやり直しです。電気・電話はありません。小さな板葺き屋根の住居も3kmの山道も作り直しです。先のことを考え途方に暮れたことは、数限りなくあります。何度山を放棄しようと思ったことか。

それでも、ともかく少しずつ、一生懸命に禅道場に必要な施設を建設していきました。

施設類だけでなく、禅道場に相応しい環境を整えるため植林活動にも努めました。これまでに植林した苗木の総数は25万本に及びます。

私の活動に対する評価は、自然環境保護活動の方面からでした。禅に対してのものではなく、脇役の植林活動に対してのものです。今や希少植物と呼ばれますが、本来この地にあるべき樹木を植林していたことが注目されたのです。

まず、近隣4市の小学生たちが学べる場として　ヴァルゲム山は活用されるようになりました。

その後、自然環境保護活動の良い例として、子どもたちのみならず、教師・老人・農民の研修会施設として使用されるようになりました。

私は禅僧としての本分を忘れていません。ヴァルゲム山は禅の修行道場です。

「この山で研修するには必ず坐禅をしなければならない、禅の修行をしなければならない」としました。現在では州軍警察（Military Polis）の研修も引き受け、禅光寺での2泊3日の研修に参加しなければ、エスピリト・サント州では軍警察官になれないようになっております。

これらの活動により、私はイビラス市のみならずフンダオ市・ジョン・ネイバ市・ヴィラ・ヴェーリャ市・首都ヴィトリア市の名誉市民になっています。

2002年、禅光寺は自然環境保護活動の最高の栄誉であるユネスコのムリキ賞を受賞しました。

2004年、エスピリト・サント州議会は、禅光寺創立30周年を議事堂内で祝ってくれました。

つまり、州内の住民約340万人のすべてが、祝ってくれたことになります。

最後に、今年は日本人が初めてブラジルに移民して100周年の記念すべき年です。各地で様々な催し物が計画されていますが、今年4月10日、エスピリト・サント州政府は、ブラジルと日本の文化交流に多大な貢献をしたという理由で、禅光寺を特別表彰してくれました。

※編集部注：発表当日のビッチ師は、この原稿を骨子として、パネルを使って説明されました。

シンポジウム発表者

クサノ宗禅師

パネリスト　クサノ宗禅師

皆様こんにちは。私は、北欧ノルウェーから参りました、クサノ宗禅と申します。

3ヵ月ほど前に、ヨーロッパ布教総監部の今村源宗総監老師から、ＳＺＩ創立15周年記念シンポジウムで、日本語のスピーチをしてくれないかといわれました時には、とんでもないことだと思いましたが、本日こうしてこのシンポジウムに参加させていただき、やはりこれは素晴らしい経験をさせていただけたと、感謝しております。

さて、私は「人権」をテーマに、母国ノルウェーでの曹洞宗の布教活動についてお話させていただきたいと思います。ヨーロッパで布教活動をしておりまして、いつも痛感することは、外国での曹洞宗の教えの基本的知識が不足しているということです。曹洞宗を世界中に布教するには、文化の違いを受け入れることも重要ですが、まずは、曹洞宗の教えの基本をきちんと外国でも教育することが最も大切だと思います。それぞれの国には、独自の習慣や文化があることは当然なのですが、曹洞宗であるにもかかわらず、曹洞宗の基本の前に、それら独自性があるのはおかしいと思うのです。曹洞宗としての基本が無いところに、独自の文化を取り入れると、それは曹洞宗ではなくなってしまいます。

たとえば、いくつかの場所では尼僧が髪を伸ばしたままでいることが、一般的であったりします。曹洞宗では、男性と女性の僧侶に「差」は無いと規定されていますが、男性も女性も得度して等しく僧侶になることが出来るのであれば、尼僧だけが剃髪しないということは、この規定が平等に適用されていないということであり、曹洞宗の教えの基本がきちんと理解されていないということになります。現在曹洞禅は世界各地に広まっていますが、曹洞宗の教えを正しく布教するためには、世界中に共通する教えの基本をしっかりと教育することが、まずは何よりも大切だと思います。

私たちのような外国人僧侶を受け入れることは、曹洞宗にとり大変なチャレンジであると思いますが、これらの受け入れに

対する努力が、時間と労力をかけるだけの価値があると、曹洞宗が考えてくださっていることを願っております。

私は、總持寺の坐禅会に3年間通った後、1998年6月、当時總持寺の貫首であられた板橋興宗禅師より得度を受け、その後一年間、總持寺の伝統ある僧堂生活を経験し、多くのことを学びました。總持寺で過ごした後は、西有寺で安居しましたが、そこでもまた素晴らしい経験をさせていただきました。そして、6年前の2002年に開教師となり、母国ノルウェーで仏教を教えるため、13年過ごした日本を離れ、ノルウェーに戻って参りました。

ノルウェーは千年の間、キリスト教だけを信仰する単一民族国家でしたが、20年ほど前から、他の多くの欧米諸国同様、沢山の難民を受け入れるようになりましたので、人種も宗教も単一ではなくなりました。他民族とともに、キリスト教以外の宗教も受け入れるようになりましたが、ノルウェーにはまだ国の宗教があり、現在でもノルウェーは、ルーテル派のキリスト教国です。

このシンポジウムでのトピックのひとつは「人権」についてですが、ノルウェー政府は、この「人権」問題を非常に重要な課題として受け止めていますので、たとえキリスト教という国教が定められていても、『すべての宗教と信仰が等しく平等である』ことを政府は法律で明確にしました。つまり、国教会の牧師と同じ権限が、仏教僧侶である私にも認められているということです。このようなことは、ヨーロッパのほかの国でも余り無いことだと思います。

勿論、新しい法律によりすべてが急に変わるわけではありません。法律上の一文だけでは、人々はそう簡単には変わりません。彼等の考えを変えるには、「信用」が必要です。

未だ会った事も無い人や、聞いたことも無い宗教を信用するのは難しいことです。

一般にノルウェー人は、日本についての知識があまりありません。仏教についても、ほとんど知りませんので、ましてや、曹洞宗のことなど、全く知りません。このような状況での布教活動により、私は「信用」ということの大切さを痛感いたしました。

仏教でも何でも、教えるということは大変責任のあることであり、また易しいことではありません。私は、より良い教師となるために、地元の大学で「特殊教育学」を学び、現在は認識障害のある生徒を専門とする教師として、高校で働いています。

教師という職業は、単に仏教の僧侶という立場よりも、ノルウェーでは理解され易く、また、信用してもらえると言う利点もあります。

キリスト教国で、仏教の布教をするには、まず、沢山の情報を文書で提示する必要がありました。またそれに加え、人々の信用を得る必要もありました。この6年間、様々な人々やグループに会い、心を込めて仏教の話をしてきました。勿論私達の小さな寺でも、様々な活動をしてきました。現在ノルウェーの曹洞宗には、約100名のメンバーと、5名の僧、そして尼僧が1名おります。

私は日本の僧堂での日々も含め、13年の歳月をかけて、信徒一般向けの曹洞宗の経典、僧侶向けの経典、そして回向要集を先月出版することが出来ました。

ノルウェーで、もし私が日本語を話し、日本語の経典を使っていたら、どうでしょうか。よく分からない人や文書をはたして皆が信用してくれたでしょうか。ノルウェー政府が「人権」を認めろと言ったところで、人々は私のことを考え、話に耳を傾けてくれたでしょうか。まず無理でしょう。ですから、ノルウェー語で書かれた、意味の分るテキストが必要でした。

最近ノルウェーでは、同性間の結婚を認める新しい法律が施行されました。保守的なキリスト教の宗派では、この法律の施行は、最も受入れ難い問題として、長い間論争の的となってきました。

あるグループに、禅について話をした時に、仏前結婚についての質問がありました。「もし、あなたのところにあるカップルが来て、自分達はホモセクシャルですが、結婚式をあげてくれますか。と聞かれたら、あなたは何と答えますか」。私は、「彼らに帰るように言います。」と答えました。その人は再び質問してきました。「では、あなたは男女のカップルだけを結婚させるということですね」。「いいえ、私は彼らにも帰るように言います」。私がそのように答えたところ、皆は静まり返ってしまいました。そこで私は、「異性愛者を結婚させることも、同性愛者を結婚させることも私はしません。私は、人間同士を結婚させます。しかしながら仏教徒であろうとも、私はノルウェーの法律に従わなければなりません。」と説明しました。

ノルウェーの曹洞宗の回向要集には、男と女の結婚式については書かれていません。あるのは、2人の人間同士の結婚式についてです。

私のもとに、集中力や精神的なプレッシャーに問題を抱える、国際級のアスリートやオリンピックの選手が集まるようになりました。私が楽しみにしている活動のひとつに、そのスポーツマンたちと一緒に坐禅をし、ともに学ぶことがあります。彼らは今では道元禅師と私を信用してくれています。

また私は、国教会の牧師や、カトリックの神父、そしてムスリムのイマーム達とともに、刑務所内での活動に参加していますが、これは非常に学ぶところの多い経験です。ノルウェーでは、悪いことをするとすぐに刑務所に入れられてしまいますので、刑務所に入るのは、そんなに難しくありません。でも、仏教の僧侶として、その勤めをするために刑務所に入るのは、そんなに簡単ではありません。何と言いましても、まずは「信用」されることが必要です。ノルウェーでは、刑務所でも「人権」が適用され、どの囚人も自分が選んだ聖職者に面会する権利を与えられています。

ノルウェー社会は、他の多くの国のように、多文化、多民族、多宗教の社会になりました。何が大切かといえば、お互いを信用し、信じ合うことです。信用の上に築かれる関係には、宗教や文化の違いなどは重要ではありません。他の民族の伝統や宗教や考え方に寛容になることができれば、争いごとの無い、平和な世界へと道がつながることでしょう。平和な世界を作るには、仏教徒のような反デュアリスティックな心を持つことが大切です。そのためには、道元禅師がお唱えになった、「只管打坐」ということが、ひとつの良い方法であると、私は信じておりますので、これからも、ノルウェーで皆と一緒に坐禅をし、ともに学んでゆきたいと思っております。私はノルウェーの千年の歴史と宗教を変えることは出来ませんし、その必要もありません。必要なのは、ただひとつ、自分が変わることです。

… 海外レポート① …

海外の仏教についての雑感 ー韓国の仏教と西洋仏教ー

東北福祉大学准教授 斉藤仙邦（さいとうせんぼう）

■ はじめに

現代の仏教の現状を語ろうとするときに最初に思い浮かぶのは、目の見えない人がゾウに触ってそれについて描写する物語である。ある人は足に触って、それは太い柱のようだといい、ある人は鼻に触って、長いホースのようだといい、ある人は尻尾に触ってムチのようだというものである。現在、仏教はどんどん変革している。伝統的アジアの仏教が変革しているのも感じられる。キーワードは社会参加である。また、現在、仏教は西洋に広まり、西洋世界のあらゆるところで仏教センターが開設され運営されている。その形態も、運営のしかたも、伝統仏教とは一線を画している。そこには移住した人々が持っていったエスニック仏教とは異なるいわゆる西洋仏教が成立している。そんな中で、現代仏教に関して何かを言おうとするとき、どうしても、全体的なことはいえないし偏ったものになる。しかし、ここであえてその不安をおして、自分の知っていることの描写を試みてみようと思う。それは仏教研究者として私が出会った韓国仏教、そして西洋仏教である。

■ 韓国での体験

昨年（2007年）、大学の国際交流事業で学生を韓国に引率した時、そのプログラムにテンプルステイというものを組みこんだ。そしてなんとかお願いして住職との面会もセッティングした。それは、後に述べる2003年に行った韓国仏教調査の手ごたえで、韓国には「本物の僧」がいるという印象があったからである。「本物の」というのは変な言い方であって他にうまく表現できないのであるが、韓国の「本物の僧」と日本の学生を会わせてみたかったのである。いくつかのプログラムが終わって住職との面会が行われた。最初は15分の予定だったが、住職の話は1時間近くになり、そのあと日本の学生が次々に話をして2時間くらいになった。夜の11時くらいまで続き、そのためほとんど寝る時間もなく次のプログラムに入った。住職は生きるとはなにかということを話した。それもほとんど仏教用語を使わずにである。そしてそれを聴いていた学生は自分の体験、それも生きることそのものに関する体験を語り、質問し始めたのである。普段知っている学生が、まるで人が変わったように内面的になったのには驚いた。「今の学生は・・」なんてたかをくくっていたが、それは間違いで、彼らも「生きることと死ぬこと」という問題と正面から向かい合っているのであり、普段全くそのそぶりを出さないのは、出す機会がないからだということにはじめて気づいた。そしてその面会が終わってある学生は「生き方を少し変えようと思う」と言った。このことは、自分が予想した以上のことで正直驚いた。

■ 僧侶の力量

この体験の原因はこの住職の力量だけの問題ではないのかもしれない。海外でのテンプルステイという特殊な状況もあるし、また通訳が非常に流暢で上手だったからかもしれない。しかし、仏教用語で煙にまくことなく、仏教の精神を伝え、それを聞いた人を内面的にし、生き方を少しでも変えようと思わせるのは並大抵のことではない。こんな住職はめったにいるものじゃないと思うのが普通であろうが、韓国ではそうではないだろうという予想があった。2003年に調査したのは韓国最大の仏教教団で禅宗系の曹渓宗である。出家主義をとり、その修行体系は非常にしっかりしていて、寺院の住職になるには相当の修行を積んでかつそれだけの力量を持っていなければならない。ただし、その時テンプルステイした寺は韓国天台宗で、出家主義ではあろうが、修行体系がどうなっているかははっきりとはわからなかった。しかし、修行の問題だけでなく別のことでもその力量は予想していた。それは、檀家制度がなく、信者の獲得にその寺の生き残りがかかっているだろうということである。ご存知のように現在、韓国では宗教を信じる人のおよそ半数強がキリスト教系の宗教である。そのことは、韓国仏教は仏教の宗派や寺ごとだけでなくさらにキリスト教をそのライバルとして視野に入れてなくてはならないということを意味している。単に仏教の専門用語を駆使して、保守的な教えに終始しては信者がついてこない。そんな中で無能な僧侶、あるいは宗教的感性に欠ける僧侶、生きる指針を与えることのできない僧侶が住職になることは、世襲でない場合は、あまり起こることのない事態であろうというのが予想であった。三雲寺というこのお寺は春川の中心部に近いところにあり、広大な伽藍を構え、また、社会福祉施設を運営する大きな中核寺院であるから力量も特に優れた僧が選ばれて住職になるのだろう。以上が予想したことではあるが偶然に体験したことである。このように現実的な力量がある住職がいるだろうというのが韓国の仏教のイメージである。このことは日本の仏教を考える上で刺激的である。

■ 2003年調査旅行

さてここで2003年の調査旅行について報告する。愛知学院大学の箕輪顕量教授の主催で韓国仏教の瞑想についての調査を行った。韓国で最も大きい教団である曹渓宗の禅院を主に調査した。そこで出会った仏教は非常に印象深いものだった。基本的に出家主義であること。僧侶は結婚しないこと。僧階については明確なルールがあり、それも相当修行をつまないと上に上がれないこと。徹底して坐禅をつみかさねること。などなど、当たり前のようなことであるが、実際に行われているのをみると圧倒的だった。

■ 曹渓宗の僧侶の特徴

曹渓宗では、一部の特殊な例外があるが完全な出家主義をとっており妻帯を認めていない（他の宗派で妻帯を認めているものもある）。出家するための条件、僧階の上り方、寺院の住職になる規定が明確である。出家して沙弥になるのは高卒以上としている。15才以上という条件であるが実際には高卒でないとなれない。また沙弥になる前に6ヵ月の行者の期間がある。比丘または比丘尼になるためにも講院、僧院あるいは東国大学で4年以上の修行あるいは勉学が必要である。比丘を10年経過した後に小さな寺院の住

職あるいは本山の役僧になれる。その10年の間に3年間の禅院での修行、かつ2年以上大学院クラスの教育を受けなくてはならないという。詳しくは箕輪氏の報告にあるが、禅を修行する禅院は比丘のためが60ヵ所程度、比丘尼のためが40ヵ所あり、比丘は2100人、比丘尼が940人程度が修行できるということである。さらに、制中には量的にも、質的にも比較にならないほどの坐禅が行われている。話頭という日本臨済宗の公安禅と同じ系統であるが、それを徹底的に行っている。また、お国柄であろうが、都市部の寺院のお堂には多くの信者が参集し念仏を唱えたり礼拝したりしている。

教義の要素のなかに現世における生き方としての仏教の教えを入れている。人に説くときは、内向きの言語使用ではなく、一般にも訴えかけることば使いをする。また、信者の帰依心が強い。つまり、自己開発の修行は出家者が行い、信者は念仏や礼拝などにより修行するというアジアの伝統的聖俗分離が行われている。

■ 社会福祉活動

また、社会福祉活動を積極的に行っている点は注目すべきである。ソウル老人福祉センターなどは、ソウル市の委託事業として曹渓寺が行っている。また、曹渓宗に限らず寺院が福祉施設を運営していることが多い。これは、韓国仏教の大きな特徴になっている。この運営は、信者のボランティアの協力も仰いでいるもので非常にユニークな活動になっている。

■ 韓国仏教の背景

ここで韓国仏教の変革の特徴をまとめると以下のようになるだろう。第二次大戦後、仏教界は日本の影響から脱却しようとし伝統の再発見に努めるなかで全部ではないが、たとえば曹渓宗では出家主義と厳格な修行主義をとった。また、キリスト教が普及する中で、対抗的に自身も変革することを求められ、現代人の悩みに積極的に答えるようになったこと。この二つの点が大きいと思う。韓国仏教がとった計略の一つが、伝統回帰である。出家主義を見直し、その本来の形に変える。これにより、世俗を捨てて、無一物になり自己を見つめるという、どんな社会でも潜在的にあるニーズに応えることができたこと。曹渓宗だけで年間数百人の出家者を受け入れていることは、その証左であろう。また、七仏庵の性観スニム師の話では、キリスト教の修道院に行く人が昔は多かったが、最近では仏教の尼僧寺で出家する人が多くなっているという話もあった。また、年齢制限を設けるということの理由の一つに十分な出家者がいるということがあろう。ただし、この年齢制限というのは私には特に興味があった。日本では最近、定年を迎えてから寺に入ろうとする人もいる。人生の一区切りつけたところで、長く抱いていた人生の問題に取り組んでみようとする。また、余生を過ごすのに寺に入るという選択肢もあるということであろうが、そういう選択に対して門戸を閉ざしているのは興味深い。調査の結果からすると、韓国の修行者は圧倒的に瞑想に費やす時間が多いし、また、人生のすべてが出家者としての生活になっている。また、先に述べたように専門的仏教研究が僧侶としての経歴に関係するので、仏教研究者も多い。また、今年ソウルで開催された第3回仏教結集大会（於東国大学）では瞑想に関する部会が独立してあり盛会であった。

以上から考えて次のことが言えるのであろうか。一つは、伝統的で保守的な修行体系に依拠し、信者の帰依の心をつかんだこと。次の段階として現在は、社会福祉的な社会貢献に向かっているということである。また、今回耳にはさんだのであるが、曹渓宗では葬送儀礼にも関心をもち、日本の仕組みを研究している。今後、葬送にもかかわってゆくことを考えているらしい。現在から見ると非常に戦略的な変革である。しかし、修行階梯をしっかりして優秀な僧侶を維持していること。社会の中で出家したい、あるいはしなくてはならないというニーズに応えているところが特に印象に残った。

■ 仏教の西洋への伝播

ここで西洋仏教について述べて日本の仏教を考えてみる。西洋仏教は韓国仏教とは違った面から考えるきっかけを与えてくれる。

近代に入り、最初は東洋研究の一部だった仏教が広く西洋に受け入れられるようになって100年以上である。その始まりの一つはあるイギリス人が上座部仏教の僧になったことであろう。その彼らの心の奥底に、自分の生きてきた文化的背景のすべてを捨てて身を投じる何かを感じたのだろうか。1983年にはシカゴ世界宗教者会議が開催され、アジアの宗教者が喝采をあびている。スリランカのアナガーリカ・ダルマパラは、その流暢な英語もあいまって仏教徒としては最も注目を浴びたという。彼は1925年ロンドンを訪問し、親交のあったオルコット大佐やブラバツキ夫人と共にマハー・ボーディ協会を設立している。彼らの中に日本からの出席者も幾人かいたが、後に大きな事跡を残すことになったのが釈宗演であり、彼が連れて行った鈴木大拙である。彼によって紹介された「禅」は、西洋において「宗教」や「哲学」という枠組みを超えたインパクトを与えた。洗練されたスタイルと美意識を備え、哲学的深みに満ちた「禅」という概念をセンセーショナルに西洋（アメリカ）にもたらした。鈴木大拙がもたらしたのが知的な「禅」であるとすれば、神崎如玄は禅のもつ土臭さと信実性であろうし、鈴木俊隆は曹洞的只管打坐をもたらし、多くの実践者を育て、センセーショナルなインパクトを与えた。そのころヨーロッパでは弟子丸泰仙が、文明批評を内に含む実践を広めていた。この頃になると、かなりの数のヨーロッパ・アメリカ人が日本の禅堂を訪れ、修行を始めている。彼らの内から、故国に帰って実践家、そして思想家、研究者として名をなす人が出てくる。日本を中心にして書いてきたが、1960年代になると、亡命チベット僧にインパクトを受けた人々が次々にチベット仏教に帰依し始める。70年代から80年代になると、「禅」ブームも落ち着きを見せ、むしろチベット仏教が盛況になる。多くのカリスマ的なラマが西洋人を魅了していった。そのような中でダライ・ラマは、チベット仏教を代表する立場を超えて広く一般にその存在を認められていった。それだけでない、ベトナム出身の

ソウル曹渓寺で瞑想や念仏をする信者（2003年撮影）

ティック・ナット・ハンは、大乗禅をバックグラウンドとしているが、その人間的力、実践力、仏教思想を生かした社会活動への取り組みは群を抜いている。また、ビルマでの実践から始まったヴィパッサナーは、その得られる効果の高さから、急速に広まった。また、台湾や韓国の仏教指導者も西洋におもむき信者を獲得している。かくして、ヨーロッパやアメリカの各都市には、仏教センターと呼ばれる施設がいくつも見つかる状況が生じた。彼らは多数ではないし、寺のように単独の建物で独特の装飾があるわけでなく、ビルの一角のフラットだったりするので目立ちはしないが、どの都市でも複数、10ヵ所ぐらいあるのが普通になっている。もちろん、山中あるいは郊外に大きな僧院風の建造物を持っていることもあるが、そういう場合は、仏教実践だけでなく、僧侶養成の機能も果たしていることが多い。

■ 伝播の特徴

このような仏教の西洋社会への広がりの特徴は以下のものである。

1）アジアでは伝播に数世紀をかけた現象がほんの短い時間のうちに起こっている。
2）そのホームグラウンドでは、考えられない交流が行われている。たとえば、テーラバーダとチベット、日本の宗派によるグループが、一つの都市の非常に近い場所にセンターがあり、かつ僧侶どうしの交流だけでなく、信者や実践者、あるいは参禅者が行き来をしている。あるグループに属しているメンバーでも、以前は別のグループに属していたという場合も多い。

以上の現象は、仏教の伝播という問題を考える上で大きな示唆を与える。仏教興隆後何百年もかかって伝播したものが、現在では数十年で起こっている。また、その交流の仕方も独特である。各宗派ごとの話し合いとか、仏教とキリスト教の話し合いというようにその信じるところを主張し合い、あるいはお互いの主張を理解したりというのとはまた雰囲気が違う。お互いにスピリチュアルな世界にかかわる仲間の交流だったり、いろんなテイストのスピリチュアリティを楽しんだりする交流でもある。グローバル化する社会での多文化主義であり、異なる価値観を受け入れようとする生き方の態度でもあるだろう。そして、すぐ近くに本来何千キロの距離を隔てていた宗派があるという状況は以前には考えられなかったことである。この状況はお互いに競い合い、対立するという関係になりそうであるが、そうではなく、対立よりは、他者をそのままで受け入れながら支えあうという姿勢が見られる。これは仏教の思想が影響しているものだろう。現代の社会福祉の基本的な態度は、まずお互いの価値観を尊重するというものだが、それと共通するところが興味深い。

■ 西洋仏教の特徴

こうしたありかたは、日本で私たちが目にしている雰囲気とは全く異なる。檀家制度という非常に安定したシステムに支えられている日本仏教界では想像できないことである。だからといって、西洋仏教が新興宗教のように強いカリスマと信仰によって成立しているとも思われない。それよりは個人に中心がおかれた、ゆるいつながりによって成り立っているようである。この西洋仏教の特徴についてはいろいろあるが次のような点が特徴としてまとめられる。

1）ジェンダーの問題の克服。グループに女性の参加も多いが、男女は全く平等である。グループのリーダーが女性であることも珍しくはない。
2）民主的なシステムの導入。リーダーの選び方は明確なルールと開放性がある。各メンバーの関係は基本的に平等であり、有無を言わせない差別や格差というものは特に見られないし、それを避けようとする。また、組織の運営はメンバー・フィーを主なものとしている。
3）出家者と在家者の区別が伝統仏教とは異なる。伝統仏教では、在家者は出家者の指導にしたがい、功徳を積んで果報を願うという図式が見られるが、西洋仏教では、メンバーは基本的に実践者である。それぞれが実践を通して、その理想である解脱をめざしている。
4）どのグループも、瞑想が宗教的実践の要になっている。どのメンバーも非常に地道に毎日決まった時間を瞑想に費やしている。「禅」の宗派自体はブームではないかもしれないが、「瞑想」は最も広く行われる実践になった。

以上の特徴は「個人」というものの思想と関係する。西洋文化の中核をなす、個という概念がそのままま仏教と出会っていると考えられる。自己を見つめるという、日本でもその最初期から行なわれていた修行の要綱がまさに現代の西洋人の個に対して訴えかける力があったといえる。鈴木大拙から始まる内実としての仏教の紹介が、その最も核となるところの伝播という形で実を結んでいる。仏教は文化の異なる地域に伝播するとその地域の文化の衣装をまとう。ただし、その最も核となるところは変えない。インド仏教、中央アジアの仏教、中国の仏教、東南アジアの仏教、そこには文化だけでなく大乗と小乗という大きな変化もあるが、その最も根本のところは受け継いでいる。そもそも大乗と小乗といっても、大乗仏教からすれば、小乗というのも一つの概念にすぎない。その概念が批判されているだけで実際の仏教教団が批判されているわけではない。「自己を明らかにする」というその要諦がどの地域の、どの時代の仏教にも根本的な問題としてあったのである。そして、その伝播の実際が私たちの目の前で起こっていると考えられる。

文化的要素を見てみると、日本の先祖崇拝もそうであろうが、それらはあくまでもその土着のものの発展型である。ヨーロッパ仏教（アメリカを含む）は、その個を見つめるという点で仏教のＤＮＡを受け継ぎ、個人主義、民主的自由主義と結びつくところで西洋の文化を受け継いでいる。社会参加型仏教とも言われているが、それはヨーロッパの伝統のなかの文脈であることに注意しなくてはならない。単純にまねることなどできないのである。そうではあっても、グローバル化のなかで東洋の仏教に大きな影響を与えているし、東洋の仏教も影響をうけるべきであろう。現代社会が西洋の影響の上に成り立っているのであるから、東洋における仏教の変容の方向がそこに見えるのだろう。西洋仏教には現代が色濃く反映している。

■「曹洞禅」の伝播

以上のような西洋仏教の全体的特長を挙げてみると、日本曹洞宗から見た「曹洞禅」の西洋への伝播を考える場合に注意が必要になるだろう。西洋社会での「曹洞禅」とは何だろう。日本国内での曹洞宗としての、あるいは曹洞宗に属する僧侶としての考え方としては、法を守り伝えてゆくということには、特別な意味が付け加えられている。一箇半箇といわれるその独特の相続感、威儀即仏法という儀式重視の傾向、それらは曹洞宗のなくてはならない性格になっている。西洋でも同じであろうが、現実に曹洞宗の法を受け継ぐ私たちがなにをすべきかということは同じではないだろう。西洋における曹洞禅のひろがりに対する態度にも注意が必要

だろう。道元の教えに則っていても、新しい仏教かもしれない。その多くの要素は日本の文化的背景が生み出したものではないかもしれない。西洋仏教には西洋仏教の必然もあって、その方向があるだろう。

■ チャレンジということ

エジンバラで、あるイギリス人の仏教徒と話していたときに非常に印象的なことばがあった。それは「チャレンジ」ということばである。「わたしたちは常にチャレンジしなければならない。そうでなかったら消滅してしまう。」私たちが使うチャレンジという言葉とはその意味が違う。このチャレンジは、常に自分の存在価値をさがし、その実現を自分の環境（社会を含む）に対して行動に移してゆくことで目指すことである。あるヨーロッパの僧院を訪ねたら、そこは曹洞宗の伝統にあるのであるが、線香を立てることや焼香はやめていた。煙に対するアレルギーがある修行者がいて、みんなで話し合って決めたそうである。小さなことであるが、日本の私たちができるであろうか？そしてその変更は本来の仏教からの逸脱として考えることができるだろうか？僅かの変更のその重い意味を考えてほしい。また、社会の支持がなければあっという間に消滅するかもしれないというのも本当であろう。もちろんそれは社会に迎合することとは一線を画している。彼らは、剃髪し、僧衣を着て学校に行き、自分たちの生き方、そして自分たちが社会や人間をどう思っているかを生徒たちに話しかける。もちろん学校側が希望してでの行動である。また、ホスピスでは終末期の患者の相談にのり、刑務所では受刑者の相談にのっている。これらは、そのまま存在意義であり、チャレンジなのである。諸行無常は、「すべてのものは変化する　Everything is changing. 」という表現がされることが多いが、それには自分自身や、自分たちのグループも含まれるのである。私たちがどうしていくかということは、そのような西洋での動きも視野にいれながら、自分たちで考えなくてはならない。まず、自分の危機感を素直に正確に把握することから始まるだろう。まず自分の状況の把握、そして優先順位を決めていくことは、問題解決においては共通の方策である。

■ イベントということ、寺を継ぐこと

イベント型の展開をしていこうということが最近叫ばれているし、また、その利点は大きいだろうがそれだけではないことは確かであろう。日本の寺院後継者はなにをするべきなのだろうか。寺をついで、それを守ろうとする人は、その意義をきちんと考えなければならないだろう。しかし、そんなに簡単にその意義が解るものではないし、そんなことはどこにも書いていないので、わかろうとすることは大変である。また、そんなことは仏教のどの本にも書いていないし、道元も、ブッダもそんなことは何もいっていない。私たちは、私たち自身でその存在意義を考えなくてはならない。

私は50年後の宗門がどうなっているか考えられるかという質問をよくする。現在のままでつづくだろうか？長い目でみれば私たちもチャレンジングな状況にあるのである。しかし、誰もが社会参加型を志向すべきだという答えがあるわけでないのだ。ひたすら、自己の究明に打ち込むこともある。わたしとすれば、死を迎える不安に対して、仏教はなんらかのケアをするべきだとは思っている。医療で言えば終末期にある患者さんの苦しみに仏教は答えなければならない。また、施設で老後を過ごす人の安心を与える試みをすべきだと思う。そういう方向も考えられる。法事や葬儀の意味を追求するのも一つだろう。自分ですべての問題が解決してはいなくとも積極的に法要の場でみんなに語りかけるようにしたほうがいいと思う。多くはできないのでまずできるところからやるべきだろう。日本の僧侶がかかえる問題は一人一人違う。お寺の規模や場所、性格がそれぞれ違うし、それらは選んだというよりは、そこに縁あって自分が意識する前からそこにある。ただ、それは財産ではなく、仏教であるかぎり、縁あって受け継いだものである。それぞれの重さがそこにある。

■ ネパールからの僧侶

日本での仏教後継者に参考になる話を付け加えておこう。今年の5月に韓国で仏教学の大会があった。大会後、文化研修ということで寺院を訪れ参禅研修をしたのだが、そのとき参加した研究者にはスリランカ、タイ、ネパール、ブータン、チベット（ドイツ人）からの僧侶がいた。日本での学会より国際色豊かであるといっていいのだが、その時ネパールの研究者と話したのが印象的であった。彼はネパール仏教について熱く語ってくれた。聖職者がカーストのようになっていること。彼も聖職者であるが妻も聖職者であり、結婚できるのは聖職者の家系どうしだけであること。大乗戒を守っていることなどである。長髪ではないがパンチパーマのような髪をし、洋服を着ている。また、彼は精力的な人物で、弟子たちや後継者たちを積極的に留学させ、現在ではネパールに仏教の専門大学を設立したといっていた。そして、社会の不平等と貧困に対して積極的に活動もしている。私が日本の地方（田舎）の経済的困窮や、社会問題をはなすと、とにかく信者どうしの自助グループをつくればいいんだ、寺はそのためにどんどん活動すればいい。困っている人を助けるのになにも理由はいらないといっていた。また、戒律にしても、信者に説くときは、全部を一様には説かない。人に暴力をふるい、殺してしまうことと、酒を飲むことは同じレベルで語れるものではない。また、小さな暴力と人殺しも同じレベルでは考えられない。だから酒について説教するときも、深酒によって暴力に走ったりすることが悪いことなのだというように、具体的にそして一つでも大事なことが守れるように説くということである。まず、戒律ありきなのではなく、社会生活と社会問題がありそれを支えたり、避けたりするために努力するのである。彼は世界のあらゆるところに出かけている。これもグローバルな世界での仏教である。彼を見て寺の跡継ぎとか、妻帯とか出家とかに関して別の次元で考えられると考えさせられた。自分の受け継いだ仏教を鏡にして他の仏教を見ることは危険である。他者の伝統を比較し優劣をつけることは、参加したどの僧侶もしてはいないようだった。自分の出会った仏教に誠実であることが大切なのではないだろうか？「仏法にあひたてまつること無量劫にもかたし」という。あとは自分の選択であり、そして「本物」になることであろう。

合掌

参考文献
奈良康明／沖本克己／丸山勇『禅の世界』東京書籍、２００７
奈良康明／東隆眞編著『道元の二十世紀』東京書籍、２００１
箕輪顕量「韓国仏教現状調査　－禅院を訪ねて－」『禅研究所紀要』33愛知学院大学禅研究所, pp.119-134. 平成17年3月
斉藤仙邦「英国における仏教の実践について」『東北福祉大学紀要』第30巻、157-170,2004
Coleman,J.William.The New Buddhism.New York. Oxford ,2000
Ed.Perish,Charles S. and Baumann, Martin Westward Dharma. Berkley. University of California Press, 2002

… 海外レポート② …

前角老師による白梅会の系譜

白梅会会長　獅心（ししん）ウィック

白梅会は世界に広がる仏教ムーブメントにおいて、独自の開拓を行った現代禅の普及に尽力された偉大な先駆者、前角博雄老師（1931-1995）により設立されました。

彼は類希なる豊かな見識と表現から、幅広く生き生きとした表現でお釈迦様の教えを示しました。

1979年、最初の弟子であるグラスマン徹玄老師とともに、前角老師と、彼の系統の禅指導者となるものとの関係を確固たるものとするために白梅会を組織しました。

白梅会は、梅庵白純大和尚の名前に由来します。

このように、白梅会は、前角老師の系統の禅指導者による相互の指導、宗教的行持などの情報交換を目的とした宗教組織です。

前角老師御遷化の後は、グラスマン徹玄老師が会長に就任しました。

その後、マーゼル玄法老師が10年間就任、2007年には私が会長職を拝命しております。

前角老師には12人の弟子がおり、現在、白梅会会員には80人の前角老師法系の指導者がいます。

白梅会は、アメリカ合衆国14州、ヨーロッパ6カ国（フランス、ベルギー、ポーランド、スイス、イギリス、オランダ）、ラテンアメリカ2カ国（メキシコ、ブラジル）、そしてニュージーランドに広がっています。

アメリカの主要なセンターは次の通りです。

- **禅ピースメーカーオーダー**（グラスマン徹玄老師、マサチューセッツ州）海外寺院ガイドP.38
- **観世音禅センターユタ法真寺**（マーゼル玄法老師・ユタ州）海外寺院ガイドP.26
- **禅マウンテンモナストリー道真寺**（ローリー大道老師・ニューヨーク）海外寺院ガイドP.27

ZCLA開宗40周年、前角老師追悼法要
（於ZCLA・導師マーゼル玄法老師）

白梅会定例会　（2005年・オレゴン）

- **グレートバウ禅モナストリー大願寺**（ベイズ澄禅老師・オレゴン州）海外寺院ガイドP.36
- **グレートマウンテン禅センター**（獅心ウィック老師・コロラド州）
- **ウパヤ禅センター**（慈光ハリハックス老師・ニューメキシコ州）
- **ロサンゼルス禅センター仏真寺**（ナカオ恵玉老師・カリフォルニア州）海外寺院ガイドP.15
- **陽光寺マウンテン禅センター**（フレッチャー天心老師・カリフォルニア州）海外寺院ガイドP.28

前角老師の墓所は、マウンテン禅センター陽光寺にあります。

ロサンゼルス禅センター仏真寺（ZCLA）は、1967年に前角老師により建立された母体となる寺院です。

白梅会の主な活動は、禅センターでの定期的な会合です。

この会合において、組織運営の維持管理を行い、西欧における仏教の展開に関する近況報告やパネルディスカッションを行い、それぞれの禅センターの実例や問題を共有します。

去年、ZCLA開創40周年記念を迎え、日本からの来賓を含め、100名以上の関係者がZCLAに結集しました。

6人の弟子とともに（1992年・左より グラスマン徹玄，獅心ウィック，ローリー大道，フレッチャー天心，マーゼル玄法，ベイズ澄禅）

…　海外レポート③　…

カリフォルニア大学バークレー校 日本研究センター50周年記念大会に参加して

ＳＺＩ事務局員　黒田博志（くろだはくし）

師資縁あって、カリフォルニア大学バークレー校、日本研究センター（CJS）ダンカン・隆賢・ウィリアムス所長のご案内とご招待を受け、去る、平成20年5月17日に行われた創立50周年記念大会に参加する機会に恵まれました。私ごとき未熟者が参加できる大会ではないと思いましたが、私の師父、大園武志大和尚の余光をいただき、大きな区切りの中での遭遇になります。稀の偶然ではないと思い、この由緒あるセンターの大会に坐して考えましたことは、よき師、よき友とのめぐり合いによって『自分という存在が、いま支えられ生かされている』という実感を、心底痛感させられたことです。

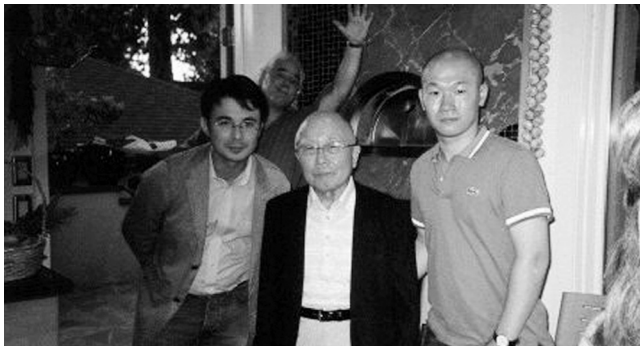
私を導いてくれたダンカン・隆賢・ウィリアムス氏は、ハーバード大学在学中、日本仏教史の博士課程に籍を置き、ひたすら仏教に傾倒された方です。

ダンカン氏と拙寺との出会いは、1998年4月に日本滞在中、横浜善光寺留学僧育英会に留学僧承認のための論文を提出された事が縁となりました。その論文のテーマは近世曹洞宗史、曹洞宗本末帳の分析、檀家寺と葬儀、祈祷寺と現世利益、僧堂と雲水修行と多岐に亘りました。

さらに研究課題を人間と人生の多様性に踏み込み、自身のアイデンティティの確立を見い出しながら、日本の仏教に学び、行じ、特に道元禅と曹洞宗に捉われ深く熱く探究する。さらにはハーバード大学での研究も相合わせながら単に仏教という枠に捉われることなく、限りなく多方面にわたるべきと思考し、曹洞宗の歴史的実態に鑑みて哲学、歴史、心理学、儀礼論に限定されてはいけない、多角的に積極的に働くべきだと考え、国や宗教の境界線を自由に越え活動するという世界観をもつことこそ21世紀の役割だと信念をおもちです。

この気概に師父も共感、触発され、留学僧第14回生として承認されるという経緯があり、以来、師父とダンカン氏は、仏教と世界観についての方向性を共有してこられたと聞いております。

この50周年大会は単に歩いて来た足跡を振り返るのではなく、いま立っている処を確認し、これから行くべき道を模索しているように感じられました。



記念パーティーには曹洞宗北米総監秋葉玄吾老師、仏教伝道協会沼田智秀会長、ほか内外関係、著名人約300人が列席、大変盛大な式典でした。その中でダンカン氏は次のように語られました。

「20世紀、日本は未曾有の戦乱を経て平和国家をめざし、経済立国として世界の頂点に立つまで繁栄した。しかしながら、なにか大事なものを見失ったように見える。アメリカもまた世界の大国として、繁栄しつつも数多くの問題点を抱えている。21世紀は信仰心と文化の世紀となります。アメリカには真の日本が伝わっていないように思う。私は仏教を通して古来から伝わる日本の大事な文化をアメリカに紹介し、また、アメリカの社会でそれがさらに溶け合い新しい文化が形成できるのではないかと考えます。

その思想の中心として仏教の教えが世の中を変えていくと信じています。このセンターの50年の長きに渡る活動。そしてさらに両国の懸け橋となるべく続けられる活動に思いを巡らせます。」と。

日本人でさえ忘れかけている古き良き日本。日本人が大切に育んできたそのこころを思うとき、故きを温ねて新しきを知るという言葉が頭をよぎります。このことは、仏教でしか実現しえないと思います。世界の平和、民族、宗教の融和など現実に直面し苦悩している。また世界の様々な境界、摩擦等、そしていま、最大の課題、地球温暖化環境問題にしても、世界各国は、自己のみの利権に固執するため、的確な解答が見出せないでいる状態。この様な複雑多岐な障壁を乗り越える力は、仏教にしかないと語るダンカン氏のこの大会に懸ける意気込みを全身に受け、気迫に圧倒される思いでした。氏は英国系2世、キリスト教社会と日本という仏教社会の両方を経験しているだけに非常に説得力があり、私自身大きな感動を覚え、氏に引き込まれてしまいました。

私はこの大会に参加しこれまで数多くの先輩や老僧の方々が身を以て行じてくださったものが、いまそこに光り輝いており、仏の道を洋々と眺めながら、旅を結ぶことができました。

… 海外レポート④ …

大悲山普門寺・アイゼンブッフ禅センター「庭園開放デー」

ドイツ普門寺 中川正壽（なかがわしょうじゅ）

快晴に恵まれた6月29日の日曜日、南東ドイツ、ミュンヘンとザルツブルクの間に位置し村四軒の片田舎にある大悲山普門寺・アイゼンブッフ禅センター（海外寺院ガイドブックP.70）に開放された庭園を見るために約2400人の人々が訪れた。

道路より普門寺の門をくぐると入ってすぐ左手上に、竹藪を背景とする子安地蔵尊が温顔で来る者を迎えてくださる。さらに歩くと右手は円形の白い砂利とその周辺をぐるりと囲い込む草花が植えられた「梵海」の庭園である。四季折々また日当たりの善し悪しにより草木が選ばれている。

人々は思い思いに椅子に座り、ほとんど話し声もなく落ち着いて、勢い盛んな草花や藤木、松や紅葉を眺めていた。

その先を行くと、今度新しく完成された本格的な枯山水の石庭「霊鷲山」となる。石50トン、手前にサツキ等、岩組みは山と祠をイメージさせる。松あり紅葉あり、さらに借景として枝垂柳の大木があって、それはさらに向こうの森の木々と重なっている。ここで人々は大いに感嘆し堪能する。

この二つの庭は京都で枯山水の造園を住み込みの弟子として学び、またこのドイツで造図師のマイスターの資格を取得した下川禅勝氏の構想と造園による。

さて最後に別館セミナーハウスの南に出ると、そこは眼下に約1万平方メートルの草地と、そこに立つ聖慈母観音様、その先は急斜面のトウモロコシ畑の丘、その右も左も小さな森、そしてその上は青空。足元の楕円形の砂砂利の上に大きな石が二つ。陰と陽の原理をイメージしてここは「阿吽の庭」と名付けられた。家一軒も見えず、広々としている。

この日の訪問者は先の二つの庭を見た後、三三五五あるいは家族連れで観音様や池の側へと降りていった。

この催しは今年丸10年目で、高地バイエルン州の都庁と同じ郡単位の庭園協会の主催であり、さらに当該各市などが協力し合っているもので、同じ趣旨でドイツ全国またイギリス、フランスとも連携し合っているという。

郡庁の呼び掛けに応じて、普門寺は今回はじめて参加した。先立って郡議会議員、隣り合う市の市長二人、郡庭園協会の理事長、また当普門寺もそのメンバーであるこの市の庭園協会の理事長の訪問があったり、関係者の普門寺訪問が予告として翌日新聞に大きな写真付きで大々的に報道された。

さて、普門寺のメンバーは半年前から準備に入っていた。またその1週間前に最後の仕上げに作務のセミナーが組んであって、参加者とともに山内スタッフ一同大いに働いた。

当日には延べ30人のチームが出来上がった。受付、案内説明係、ショップ担当、ウィーンの裏千家茶道のグループが都合7回で約130人に抹茶を接待した。造園費用はハンブルクの一篤志家の寄付により、またこれをもって独立した下川氏はすべての仕事を無料奉仕の作務としてくれた。

終始穏やかに、訪れる人々の話し振りすら控え目で、それがまた境内のたたずまいと相応しかった。

「禅と普門寺への関心を長年持ってきたが、この機会にやっとやって来た、素晴らしいところだ」と言う人。「道路より門の中に入っただけですっと気持ちが落ち着いた」などというコメントを聞くごとに、スタッフ一同のこの日のためばかりではなく、日日の参禅弁道の努力が報われる思いであった。

翌日の新聞に再び普門寺庭園開放が取り上げられた。観音様に近寄ってくる人々と遠景の教会の塔が写る大きな写真は、普門寺の地域への溶け込みを語って余りあるものであった。

…　海外レポート⑤　…

中国西安・興教寺　玄奘三蔵紀念院瓦対入座レポート

ＳＺＩ事務局員　さとうのり

シルクロードの入り口、西安（旧長安）にある興教寺は、唐代の名僧・三蔵法師玄奘の遺骨が眠ることで知られている。今年4月、新潟県の刻字作家・薄田東仙氏（日本刻字協会理事長、新潟市・延命寺住職）により制作された瓦対（日本でいう「聯」にあたるもの）と扁額がこの興教寺に納められた。3月の東京都美術館における一般展示を拝観し、「西天取経」の文字に胸を熱くした私は、西安に向かい、5月26日玄奘三蔵紀念院落成披露式において瓦対が息吹くその瞬間に立ち会うことにした。

すべては、昨年3月の興教寺の寛池住職より薄田氏にあてられた、戦乱で荒廃した同寺の再建に向けた瓦対制作依頼の一通の手紙に始まる。薄田氏はこの一世一代の大仕事に踏み切った理由を「玄奘がインドから持ち帰った経典を基にした『般若心経』などを、僧侶として日頃使わせてもらっているので、恩返しにと思って引き受けることにしました」と語っている。玄奘は国禁を犯してまで、仏教の研究と仏典の探索のためインドに旅立ち、20年近い歳月をかけた後、657部のサンスクリット語の経典を携えて長安に帰国している。注目すべきは帰国後の19年間にわたる訳経の功績で、『大般若経』６百巻をはじめ、翻訳された経典の数は総計74部1千338巻。生死をかけた求法の旅と訳経の偉業が、日本仏教の礎となっているのは明白であるが、その玄奘に対する時を超えた感謝の心を、薄田氏は「私にご縁が回ってきた」といって形にしようというのだ。「以来、どんな忙しい日も、『少しでもやれば進む。休めば取り返せない』という信念で、毎晩2時まで制作を続けました」という薄田氏の言葉に、日々訳経が終わると夜12時頃になってしばらく眠り、3時にはもう起床して原典を読誦していたという玄奘の、行持に生ききった姿勢が重なった。

西天取経の文字が刻まれた瓦対

今回制作された瓦対は大雄殿、臥仏殿、蔵経殿、玄奘三蔵紀念院のためのもので、いずれもすでに空輸され、建物の外の円柱に設置されていたので、5月の落成披露式に参加した訪問団（大栄寺専門僧堂の五十嵐紀典堂頭老師をはじめとする120人余）は、寛池和尚の笑顔と威風堂々と立ち並ぶ4対8本の瓦対に出迎えてもらうこととなった。

興教寺・玄奘三蔵紀念院落成式

玄奘三蔵紀念院は、唐代に作られたレンガ造りの玄奘の舎利塔の真後ろに位置を構えて建っていた。4対の中で、薄田氏がとりわけ悩みこだわったのは、この紀念院のための瓦対の中の「三」の文字であったという。当初この一対は、万人に読みやすい書体でと制作が進められていたのだが、「どうしてものみが入らなかった」というのだ。玄奘に対する思いは、やはり特別なものであったと思われる。その一対にとりかかる直前西安を訪ね、興教寺の土を踏み、中国式のお勤めに随喜した後、薄田氏は彫られるばかりに板に貼られていた下書きの紙を全部はがしてしまう。最初からやり直すことにしたのだ。新しく書かれた文字は、自由な躍動感に満ち溢れたものとなった。「経典は、シルクロードのあっちこっちからやってきた。そのリズム感が伝わるといいのですが」との言葉が印象的だった。

落成披露式のスピーチで、薄田氏は「興教寺で命をいただいたこの扁額と瓦対が、これから長く生きていくことを思うと感無量です。そしてこの作品を介した小さなつながりが、長く大きく日中の交流に役立つことを願っています」と述べていた。法要では中国側僧侶により中国式の、続いて日本側僧侶による日本式の般若心経が読誦されたのだった。

「沢山の人に、助けてもらって出来た仕事なんです」という薄田氏。さまざまな人々の仏縁をつなげたこの瓦対と扁額は、これから長い年月にわたり玄奘の舎利にひっそりと寄り添って、静かな丘の中腹のそこにあるはずである。

特集②　ＳＺＩ創立 15 周年両大本山ワークショップ

「仏教東漸とハイブリッドジャパン―国際時代の日米仏教―」受講レポート

講師：ダンカン・隆賢・ウィリアムス先生（北米カリフォルニア州バークレー大学教授）

ＳＺＩ副会長　細川正善（ほそかわしょうぜん）

去る、6月16日と20日に、梅雨の合間を縫って、恒例の両大本山ワークショップが開催された。今回の講師は、本会15周年記念行事の一環として、「世界の曹洞禅」～禅の果たす社会的役割～をテーマに開催されたシンポジウムのコーディネーターであるダンカン・隆賢・ウィリアムス先生が、強行スケジュールの中務めた。

總持寺での講演は、雲衲約100名と一般聴講者約30名の中開催された。折しも当日は、大本山總持寺監院伊東盛熙老師の荼毘式が修行され、福島会長はじめ事務局役員と御焼香した。

また、20日に開催された永平寺では、内講とのこともあり、雲衲だけの特別講義となった。翌朝は、講師のダンカン先生夫妻と全員朝課に随喜。朝課の後に小食（朝食）を頂き本山を後にした。

さて、今回のワークショップでは、現代の日本仏教を国際布教の歴史の観点から、先生の研究テーマを通し、大変示唆に富んだ講演を頂いた。

はじめに先生は、流暢な日本語で、今回のテーマと現在勤務するバークレー大学の由来とアメリカ社会の大学の背景について説明された。

仏教東漸　―バークレーの由来―

バークレーはサンフランシスコ湾を挟み東岸に位置し、今のようにゴールデンゲートブリッジやベイブリッジの無い時代、18世紀イギリス（アイルランド）の経験論哲学者、ジョージ・バークリー（George Berkley）に由来する。また、由来者の詩「Civilzation flow just like movement the Sun from East to West.」（文明というものは太陽の如く東から西へ移っていくものだ。）を引用し、アメリカ文明は取りも直さずヨーロッパ文明に他ならない。とした。特に他の大学を見ても殆どが神学系で形成されている。当時は、パイオニア、フロンティアといわれるように、新しい発見は東から西へとヨーロッパ文化を中心とした開拓の時代だった。

ここで、アメリカの仏教を考察すると、はじめの開教は日本からハワイ、アメリカと移民と共に渡った。お釈迦様の「仏法は西から東へと伝わる」という言葉があるが、明治に入るとあらゆる仏教者が更に東へと伝えた。日本仏教も、インドから中国、日本とそれぞれの文化が混じり融合して独自の日本仏教となった。

Hybrid Japan　―日本の仏教―

「dislocation」意味としては位置を変える。移動する。人が動く。本（文献）が動く。生きている仏教は動いている。「Hybrid Japan」テクノロジーの間。文化と文化の間。というように仏典も梵語から中国語、日本語から英語に翻訳される。翻訳されるところがハイブリッドと呼ばれる。

何かと何かが混じる。日本も仏教以前の神々の信仰、神道と仏教が混じる。神仏混合・神仏習合として、一つの文化ともう一つの文化が混じり合って更に良い物、更にどちらでもない文化が出来る。これが日本仏教だと思う。

日本仏教は、単に中国仏教をまねただけではないし、日本だけで生まれた物でも無い。日本と中国、韓国の仏教がミックスしたのが日本仏教である。

講師 ダンカン隆賢ウィリアムス先生

仏教の歴史から見てみると大きな二つの流れがある。それはculturelationとresistance culturelationに表される。culturelationとは仏教が土着する。新しい地域に入っていく手段としてどういう風に変わっていくか?それに対しresistance culturelationは変化をしない方が良い。そのまま伝えた方が良い。

梵語を中国語に翻訳するときに概念思想を分かりやすく伝えるにはどうすればいいか?中国文化の漢字、道教の教えを当てはめてミックスする。陀羅尼など訳せないのは、そのまま当て字で伝えた方が良いとした。

―移民仏教と本・美術の仏教―

現代のアメリカ仏教を考えると明治3年に日本人移民、それ以前にはハワイのサトウキビ畑の労働力として中国人が移民していた。

19世紀後半の西海岸の仏教は「Immigrant Buddhism 」（移民仏教）といわれ、同じ時期に東海岸の仏教は「Book & Art Buddhism」（本と美術の仏教）といわれた。特にハーバード大学ボストン周辺では宗教を見直す時期に新しい宗教に興味のある人が多くいた。そこで、初めて詩人のトローや哲学者が法華経を英訳した。

また、イギリスからフランスの仏教学によってあらゆるアジア仏教が研究され、『The Gospel of Buddha』（仏様の福音）が出版され、東海岸でベストセラーとなり仏教ブームが起きた。仏教に帰依し改宗する人はいなかったが、仏教を理解し思想・哲学として世界宗教の大切な一つとして、理解し受け入れられるようになった。

東海岸でそして、白人のシンパサイザーが「rationalism」合理的科学的見地から物事を見るとキリスト教の教えと合わない仏教は非常に科学的で合理的な宗教である。仏教＝科学的と考える人が増えてきた。

しかし、更にロマンチック派の中でラショナリズムも限界があるのではないか?と訴える哲学者が現れ、科学を超えた仏教思想に興味を持った人もいた。

日本の移民者と日系寺院
―日本人の移民と共に増える移民仏教―

20世紀に入るとハワイに15万人。北米に12万人が移住した。それと同時に各地に日本人町と仏教寺院が建立された。そこでは日本の仏教儀礼、先祖崇拝が受け継がれ、日本の文化と日本の教養

を身につけるサンガとしてコミュニティーの機能を果たした。

しかし、その地の文化と融合したキリスト教のプログラム・宗教音楽・日曜学校を取り入れ、地域文化（キリスト教の教会や形式が取り入れられ）と違和感のない独自の布教形態も展開してきた。

強制収容所　―第二次世界大戦―

第二次世界大戦時下、多くの西海岸の日系人は強制収容所に隔離された。特にコミュニティーの指導者は厳しい監視下の元におかれた。その中で、木村さんという方が12歳の時、マデーラ仏教会（浄土真宗）の理事であったお父さんが、FBIの尋問を受けその思想や愛国心を問われたが、英語もあまり出来ない両親は不当な扱いを受けていた。学校から帰った木村さんは両親は反思想的な人では無いと説明して、ようやく解放された。両親は取り調べを受ける前に、日本に関するあらゆる物（日本語や天皇陛下の写真）を焼却し、その中の一つに木村さんの人形もあった。

しかし、お父さんは一つだけ日本に関する物で、仏教会の書類と、教典は処分できなかった。書類は林の一角に埋め、教典は収容所に入れられても肌身離さず持ち歩き、収容所の中でも仏教は生き続けた。「国は人間が作った物だが心の信仰宗教心は政治的弾圧からも奪うことは出来ない」事を証明し、この苦しい時代を生き抜いた教えが、アメリカ仏教の土台になった。

特に収容所時代、仏壇や荘厳する物が無く、台所にある野菜で仏様を作り、花まつりや仏教儀礼をこなしてきた。この柔軟性が今のアメリカ仏教の根本となっている。みんなで一緒にやる仏教、それが第二次世界大戦までのアメリカ仏教である。

戦後のアメリカ仏教　―他国からの移民―

戦後アメリカは東南アジアに向けた海外軍事政策がとられた結果、日本と中国人だけでなく、東南アジアからの移民が多くなった。

戦争は仏教と大きな関わり合いがある。それは戦争によってその土地の文化に興味を持ち特に禅仏教を研究するスペシャリストが多く出たからである。1950年～60年代は「counterculture」現在の社会的規範と故意にぶつかり合う新しい文化が台頭してきた。特に禅ブームの兆しとして「book禅」「practice禅」「Catholic禅」が生まれ、鈴木大拙・アランワット等の著書が多く読まれた。アメリカ人がアジアに目を向けたのは、戦後、朝鮮戦争やベトナム戦争をへて精神的に疲れた若者に人権問題で大きなうねり・変化があったからだ。それは当時アメリカの土台であるキリスト教の不信感から、日本仏教へ傾倒する者が多く現れ、実践修行の禅を求めた。

また、時同じく日本から多くの開教師が渡米布教実践に当たったり、一大禅ブームを呼び起こした。ここでもculturelationが働き、食事もお粥からオートミールに変わったり、お経がグレゴリアン方式の般若心経を取り入れている所も現れた。それはその土地の人にとって、いかに心地良い音に変わって来るかによっても起こる。

近年のアメリカ仏教　―Engaged Buddhism―

近年のアメリカ仏教の流れを見ると、ベトナム戦争後、東南アジアの仏教が多くアメリカに入ってきた。その中でも特にベトナム僧であるティック・ナット・ハン師が掲げている「Engaged Buddhism」社会参加型仏教の実践が広く受け入れられている。

また、仏教色を出さないでスポーツクラブでヨガと並んで呼吸法を取り入れた「ヴィパッサナー・メディテーション」などが一般市民に向けて浸透している。

更には、チベット仏教の神秘的な魅力に惹かれた有名な俳優や歌手が多くいるハリウッドでは「Hollywood Buddhism」と呼ばれ、特にノーベル平和賞を受賞したダライラマ師の影響が大きく、多くの弟子がいる。

アメリカ人が見る他宗教のイメージとして、イスラム教はテロのイメージが強くよく思っていない。仏教も異宗教ではあるが、「平和の教え」「仏教は他の宗教の悪口を言わない」「改宗しなくても、坐禅や瞑想の修行が出来る」等、わりと仏教に対しては良いイメージを持っている。そして、その特徴としてのアメリカ仏教は、「フェミニズム」の思想が女性のリーダーを全面に押し出している。

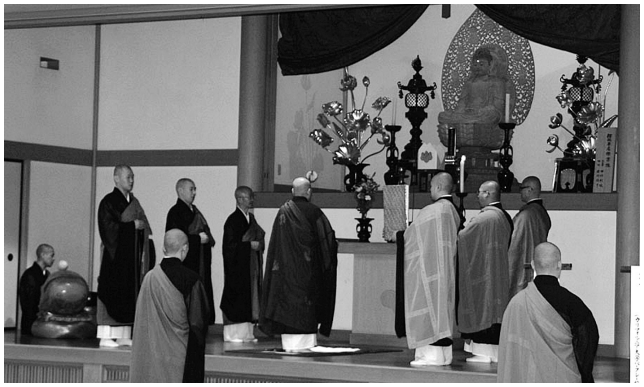
更に、新しものを求めている人たちが仏教徒となる（counterculture）仏教、それはEngaged Buddhismであり、アメリカを良い方向に変えようとする人たちである。個人の内なる問題だけでなく社会問題として経済、平和、環境問題として捉える社会参加型仏教である。

アメリカ仏教の特色としてこの3つがあげられる。

①democratization 平等化
（デモクラシー民主主義横線の対等の立場）
②feminization 男女同権（女性のリーダーが多い）
③Engaged Buddhism（社会参加型仏教）

Hybrid Japan　―今後のアメリカ仏教の問題点―

日本の仏教がアメリカを変える。culturelationの問題。トランスレーション翻訳の問題があるように、例えば日本の車をアメリカに売る場合ハンドルを左右反対にしなくてはならない。このようにアメリカに合わせることも必要だが、日本の仏教がアメリカを変えるという自負を持って、布教展開をして行かなくてはならない。 益々グローバル化する21世紀の世界に於て、日本仏教、日本の伝統文化を指導発揮できる指導者が必要とされる時代になっている。今後、更に修行に励んで世界に必要とされる指導者になって頂きたい。と先生は以上のように結んで講演を終了した。



大本山總持寺にて

大本山永平寺にて

… 国内レポート① …

キャンドルナイト2008 in 大船観音寺

【日時】5/19・6/22　17：30～【主催】ゆめ観音実行委員会

てるてるボーズをつくるのを忘れてしまったせいか両日とも雨天でしたが、5月は小雨ということもあり、煌く雨粒はキャンドルホルダーに光を添えてくれました。6月は梅雨のためにかなり降りましたが、ゆめ観音アジアフェスティバルでおなじみの近隣教区寺院、大船大衆、そして当日お手伝いにきてくれた大勢の学生（明治学院大学・鶴見大学）の結集により、無事開催することが出来ました。1日目・5月19日は神奈川県原爆被災者の会の立会のもと、採火式として以下の差定が行われています。

採火式次第
1、開式の辞
1、一通三拝
1、鼓鈸三通
1、観音経（「原爆の火の塔」より採火）
1、回向
1、鼓鈸三通
1、神奈川県原爆被災者代表挨拶

採火された火は最初のキャンドルにうつり、よしずを通じて観音様前のステージ上や境内、事務所にディスプレーされました。6月の胎内ギャラリーコンサートでは、安全な範囲でライトダウンし、蝋燭の明かりの中ハープデュオKANONの演奏（東京大空襲への追悼メッセージも含む）、在日ミャンマー人であるチー・トゥ・シェイン氏によるサイクロン被災支援への呼びかけと、托鉢からの一部義援金贈呈式を兼ねたサウン・ガウ＜竪琴＞演奏、その後、急遽当日ご紹介いただいた星野村の「原爆の火」エピソード映像が流れました。（急な対応にも関わらず映像にピッタリなBGMを演奏してくださった八木ゆみ子さんに感謝いたします）

今年参加を決めた理由はいくつかありましたが、まずはウェブサイトでのメッセージ表明が多言語表示になったこと（海外からも閲覧や参加ができる）。参加者がインターネットでメッセージをつなぐ“ココロノアカリのリレー”では、私たちの前の方は中欧の国から、次の方は日本の愛知県からの投稿でした。次に、どのような立場の人も気軽に参加でき、普段お寺に出向くことが難しい人々も足を運びやすい夜間に実践できる点です。よりよい環境は生活に平和があってこそ！蝋燭の明かりは蛍光灯に比べてずっとリラックスでき、安心した気持ちの中で人は普段語らないような思いを語るといわれます。厳かな儀式に蠟燭が使われることも納得するところでありましょう。最後に、太陽光発電やＳＺＩ「塔婆で植林プロジェクト」等につながるものとして、寺院をとりまく環境経済への関心をもっていただけるようにという思いからです。Engaged Buddhismのひとつの実践として。

今回は、使用する蠟燭の約7割は葬儀屋さんから頂いたもので、割れてしまわないかぎりいつでも使えるガラスホルダーは資源循環センターへ実際にとりにいき、ジャムや粉コーヒーの空き瓶を再利用しました。併用したカップローソクは表面が紙ですし、来場者が自由にメッセージを書いて明かりを灯すことが“献灯”となります。9月の第10回アジアフェスティバルでは、萬灯供養とキャンドルナイトとがつながり、きっとたくさんの明かりで境内が満たされることと思います。

このキャンドルナイト・ムーブメントは5年ほど前にカナダから始まりましたが、2003年頃から日本でも広がっていまや環境省などの政府機関も実践しており、今年は特に洞爺湖サミットが行われるということもあって企業や自治体も積極的に参加していました。現在、国内のSTARBUCKS　COFFEEで

も絵本が置かれている映画「GATE」（2008年7月19日公開）が、アメリカから大きなメッセージを発信していったのと同じく、これからはこのような海を越えて発信できる共通プロジェクトも増えていくと思います。宗門でも既に実践している寺院がありますが、新しい世代の環境活動に組み込まれ、多くの方々に知っていただけることを願っています。

9/6（土）第10回ゆめ観音アジアフェスティバルまでの間は、採火された原爆の火は大船観音境内にあり、常にランタンの中に灯っています。キャンドルナイトは、次回の冬至（12/22）にも規模・内容を変化させて再び参加する予定です。なお、原爆の火の日本国内での採火方法については「ＳＺＩ創立15周年記念　寺院運営ガイド」p.34に記載されています。メッセージだけを投稿するインターネットでの参加方法、回線環境がない場合も、参加してみたい！という方がいらしたら、ＳＺＩまで是非お問い合わせください。

（文責　内山）

映画『GATE』禁断の輪を閉じる祈りの旅

第二次世界大戦終戦という名目で落とされた世界初の原爆。その原爆の残り火が、現在も日本各地で大切に灯され続けています。

その火は、九州・星野村出身の山本達夫さんが、広島の爆心地に程近い書店の地下倉庫でくすぶっていた火を、その書店を営んでいた親類の遺骨代わりに持ち帰ったものです。山本さんは、その火を自宅の仏壇で絶やすことなく火を燃やし続けました。原爆を投下したアメリカへの復讐の思いの込められた火でもありました。

20余年の歳月を経て、大切に守られてきた原爆の火は、星野村役場の働きかけで、二度と原爆を使用させまいという願いと平和への祈りの象徴として永久に保存されることとなりました。

この時、復讐の思いの込められた火が、平和の象徴として生まれ変わったのです。

2005年、原爆投下から60年後の年に、星村村役場に受継がれている原爆の火を、世界最初の原爆実験の場所であるアメリカ・ニューメキシコ州の“トリニティーサイト”まで運ぶ計画がもちあがりました。

原爆の火を原爆が生まれた場所へ戻し、そこで火を消し去ることで、広島－長崎－トリニティーサイトという3つのグラウンドゼロを結ぶフルサークルにより負の連鎖を絶ちきり、永遠に眠らせたいと、僧侶たちが立ち上がったのです。この世に同じ悲劇が繰り返されることのないことを祈りながら。

トリニティーサイトに向かう一行

その先頭に立ったのが、長崎県晧臺寺住職・大本山永平寺監院 大田大穣老師です。

一行はランタンに灯された原爆の火を携えて日本丸に乗りサンフランシスコに到着、世界最初の核実験の日の7月16日から、アメリカンインディアン、さまざまな宗派の平和団体と共に行脚を開始しました。砂漠、山、250以上の町を越え、長崎原爆投下の日の8月9日に目的地である核実験場、トリニティーサイトへ到着する2,500キロの行程です。

果たして、これまで一度も開いたことの無いトリニティーサイトのGATEが開き、一行は辿り着くことができたのか…。

このドキュメンタリーが、映画『GATE』としてこの夏公開されています。

公開日 7月19日（土）より東宝シネマズ系にて

出演：マーティン・シーン、**ナレーション**：松嶋菜々子、**主題歌**：「GATE」小林武史×伊藤由奈×ミハイル・プレトニョフ

7月22日・23日、檀信徒会館にて開催された永平寺主催、第9回夏期大学講座「禅といま」に映画『GATE』の監督をされたマット・テイラー氏がお越しになり、映画についてご紹介をいただきました。

（文責　亀野）

監督マット・テイラー氏

… 国内レポート② …

災害たすけあい托鉢レポート

災害は私たちの生活に想像を超える精神的・経済的打撃を与えます。私たちは、どのようなことができるのか。様々な支援の方法が考えられますが、「困った時にはお互いさま」のこころをもって、それぞれが自らの出来ることを行うことが大切でありましょう。

多くの地域で災害支援托鉢が行われていますが、私たち曹洞宗神奈川県第二宗務所第五教区を中心とした有志一同においても定期的に托鉢を行っているところであります。

さらに、ゆめ観音、インターネット、座談会などの機縁により曹洞宗総合研究センター研究員・丸山劫外師、ＳＺＩのスタッフ有志を加え、ミャンマー（ビルマ）のサイクロン被害、中国・四川大地震、岩手・宮城内陸地震をはじめ、世界各地で発生している災害に対する緊急たすけあい托鉢を行いました。

第１回	５月24日	大船近辺	参加者10名
第２回	６月２日	みなとみらい近辺	参加者６名
第３回	７月３日	鎌倉近辺	参加者４名

変動的な予定の中での急な呼びかけにも関わらず、都合のつく者が集まっての托鉢です。特に、インターネットの中では交流があるものの、なかなか普段顔をあわせることが出来なかった仲間も加わっての托鉢は、貴い機会でもありました。

第１回

出発拠点　大船観音寺・黙仙寺（鎌倉市）

托鉢の前には、必ず読経・普回向をお唱えしてから出発します。天候はあいにくの雨となりましたが、網代傘で凌ぐことができる程度でしたので、托鉢には影響はほとんどありませんでした。大船の街は、東側に商店街が網の目状に広がっており、買い物客で溢れています。人と人との触れ合いが心地よい街です。托鉢で街をゆっくりと巡回し、浄財をお預かりする際に何気なくかけていただく言葉は、何にも勝る布施であると感じます。

托鉢は、読経しながら列を組んで歩き、何箇所か立ち止まり30分ほどその場で読経、また再び歩き出すという形で行いました。浄財をご喜捨いただいた方へは、法話と私たちのプロフィール、浄財をどこに寄託するかをを記載した紙をお渡ししています。大船での托鉢は何度も行っているおり、ゆめ観音やキャンドルナイトなどで、何回も往来しご協力をいただいている馴染み深い街ですが、何度歩いても良い街です。

途中、雨脚が強くなりましたので夕暮れとなる手前で引き上げることになりました。出発地点に戻り、お預かりした浄財を前に感謝の読経を行い托鉢は終了です。

第２回

出発拠点　貞昌院（横浜市）

この日は横浜港・みなとみらい地区で開港祭が行われており、それに併せて托鉢を行いました。貞昌院にて読経のあと、上永谷駅前で20分の托鉢、その後横浜市営地下鉄にての移動です。托鉢僧が車内に乗り込んでくるという状況にはなかなか遭遇されないと思いますし、私たちもこのような姿で集団で電車に乗車したのは初めてです。移動中の地下鉄車両の中でも、浄財をいただきました。車内での何気ない会話も、温かみを感じます。

この日もなぜか雨模様。けれども、桜木町駅前からみなとみらい地区には雨に濡れずに歩くことができる歩道があります。さすが開港祭開催当日です。たくさんの方々が行き交います。この日は特に、若い方からの浄財を多くいただきました。小さなお子さんを連れたお父さんお母さん。子どもに浄財を渡し、喜捨をするように勧めています。小中学生、高校生、カップル、外国からいらした方、ご年配の方。尊いことです。

ランドマークプラザ、クイーンズスクエアでの托鉢僧という組合せは、おそらくかなり珍しいことでしょう。みなとみらい地区をまた違った目線で体験することができました。

その後コスモワールド、赤レンガ倉庫、馬車道を抜けて、再び市営地下鉄で貞昌院に戻りました。

第３回

出発拠点　龍寶寺（鎌倉市）

読経の後、道元禅師鎌倉御行化顕彰碑、鶴岡八幡宮、小町通、鎌倉駅前、長谷へ。

長谷観音では御本尊、十一面観世音菩薩の前で読経させていただきました。気がつくと私たちの背後に沢山の人が集まり、合掌で一緒にお参りされています。紫陽花が丁度見頃でした。

その後高徳院へ移動。御本尊阿弥陀如来坐像（鎌倉大仏）の前で読経。せっかくなので、大仏裏ハイキングコースを通って帰りましょう！ということで、寿福寺まで続く山道を辿っていきました。午前中まで降り続いた雨のため、道は泥沼と化している箇所が幾つもありますが、草鞋はそんな状況をものともしません。ウグイスの声やヤマユリの花畑を楽しみながら、かつては道元禅師も通ったであろう切通しの道を歩き通しました。再び小町通りから道元禅師鎌倉御行化顕彰碑に戻り、托鉢の行程を終了。

この度行ってきた緊急托鉢は、それぞれ特長を持ったコースであったため、托鉢から得られることは多かったと感じます。

また、ニッポンの平和な風景に見慣れていると、生活すら困難な方々が多くいることを忘れてしまいがちです。

本来、托鉢は出家者の所有欲を否定し、修行に専念するために生産活動を行えなかったために、自らの身体を維持させるための最低限の食料を調達するためのものでした。けれども、それだけではなく、サンガで過ごす僧侶と、街の方々の交流は、托鉢によりもたらされることも多かったはずです。

日常とまではなかなか出来なくても、機を見つけて托鉢で街を回ることは大切なことだと改めて感じることができました。貴重な機会に感謝いたします。

お預かりした浄財は合計15万3,282円となりました。

責任をもって日本赤十字社を通してミャンマー（ビルマ）サイクロン、中国四川大地震、岩手・宮城内陸地震の被災者の方々にお送りしたほか、一部を大船観音キャンドルナイトの際に竪琴の演奏をいただいたビルマ人留学生チートゥーシェインさんに直接委託いたしました。

仏さまのおかげ
人様のおかげ
みなさまのおかげで
私たちは生きている
（大本山總持寺伝道掲示板より）

（文責　亀野）

災害たすけあい托鉢に参加して

（曹洞宗総合研究センター研究員・丸山劫外）

この度は、ビルマにおけるサイクロン被害者及び中国四川大地震被害者に対して支援のための托鉢に参加させていただきました。自分一人の財布の中から寄附をするのも大事ですが、皆さんに呼びかけて、皆さんの心を結集させていただく役目も僧侶としての役割だろうと思います。

托鉢の箱の中に幼い子どもがしっかりと握ったお金を喜捨してくれます。買い物途中の主婦の方が、家計のやりくりの財布の中から喜捨をしてくださいます。お年寄りのかたも「ご苦労様です」と言いながら喜捨してくださいます。観光にいらっしゃった方がお小遣いをさいて奮発の喜捨をしてくださいます。いろいろな人々の思いのこもった喜捨です。災害に遭った方々を気の毒に思い、少しでも寄附をしたいと思っている人たちも、ついつい何処に送ったらよいか、どうしたらよいか分からずにそのままになってしまったかもしれません。でもお坊さんが托鉢してくれていたので、その心を表せるチャンスを得たことでしょう。人々が功徳を積むためのお手伝いをする意味も思いやり托鉢にはあると思います。

お布施で生かされている自分自身にとっても、喜捨されるお金の重みを知り、僧侶としての足元を見失わないためにも托鉢は有り難い行であるとあらためて思いました。

６月には日本でも岩手・宮城内陸地震が起きてしまいました。地球上はあちこちで災害が起きています。少しでも助け合って生きていきたいものです。そして各地の一日も早い復興を祈るばかりです。

… 国内レポート③ …

『伝統の継承』
～平成20年度聖護寺国際安居レポート～

ＳＺＩ事務局員・聖護寺国際安居特別講師　大谷有為（おおたにうい）

熊本県菊池市・聖護寺で毎年６～７月に開催されている国際安居も、今年でもう16回目を数える。縁あって、平成15年から本講の通訳を主に担当させていただいている。

聖護寺に上山する人は、まず誰でもお寺に到着するまでの険しい山道に圧倒され、また鳳儀山中の眩しく輝く木々の青さに目を奪われるであろう。そして、やっとお寺に到着すると、そこで待ち受けているのは電気もガスもひかれていないという100年前と変わらぬ住環境と、坐禅中心の極めて如法の厳しい僧堂生活である。きっと、そこに居るだけで自分は一体いまどこに居るのだろう、タイムスリップしてしまったのではないだろうか、といった感覚に襲われるに違いない。

このような聖護寺の限りなく「自然」に近い環境は、海外からの国際安居参加者が安居を終え自国に戻り、その話をすると必ず周りから注目されるという。世界各国のニュースで「Global Warming」の文字を目にしないことのほうが難しい昨今、聖護寺は必然的に環境問題にも一石を投じているといっても過言ではないだろう。

この聖護寺に世界中から集まってくる参加者達の真摯な態度は、毎年変わることがない。彼らは、この凛とした空間でただ黙ってひたすらに坐り、「清規」に則り、常に正伝の仏法に正面から向き合い、それを行じ実践している。

法益の中で、故宮崎禅師の言葉を幾度となく訳した。それは“Just practice the truth without a word.”「（仏法の）真実を黙々と実践する」ということであり、彼らは正にその教えに忠実である。

我々、日本人の僧侶にとって、実行・実践において理屈を問わないことはある意味「文化」である。そして、それは時間を経て「伝統」という重く格調の高いものに変化を遂げる。

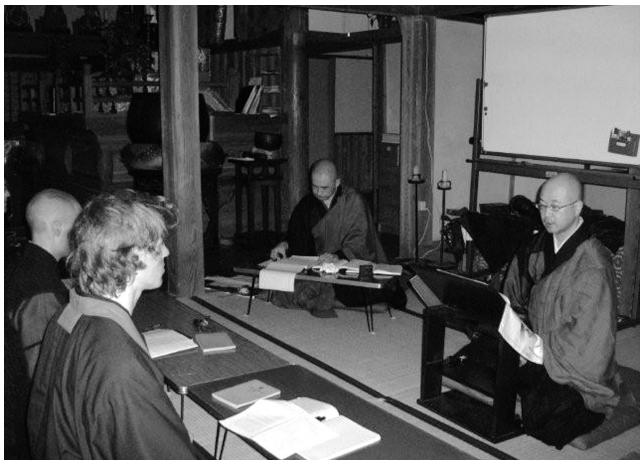
伝統という言葉に守られた私達の目の前で、頭で理解してから行動するという「言語」中心の文化を背景にもつ諸国で生まれ育った人々が、見事に黙々と真理を実践している。彼らの一挙手一投足は、伝統への真正面からの問いであり、真の意味を探る真摯な問いかけなのだ。

私達が彼らに望むことは、ただ単に聖護寺で坐禅を組み、僧堂行持・法式を学んでもらうことだけではない。聖護寺での僧堂生活を通して得たすべてのことを自国に持ち帰り、その伝統を保持しつつ、その上にさらなる「創造」をしてもらうことである。

その教えと伝統を学び感じ取るだけでなく、一人一人が自分自身にそれを反映し、自身の生きる道を創造し得ることができて初めてその教えは生きたものとなり、生きた道と成り得る。

確固たる伝統の上に、その国に相応しい仏教、これからの仏教が創造されるまで、この国際安居での真理の実践と伝統への真摯な問いは続く。

そしてその時まで、私達も伝統の中に生きているということを繰り返し認識し、僧侶としての生き方を自らに問い続けていかねばならない。



… 国内レポート④ …

永平寺主催文化講演会（東京会場）開催

6月15日（日）、大本山永平寺主催の文化講演会が駒澤大学記念講堂を会場に開催されました。この文化講演会は永平寺第三世徹通義介禅師700回御遠忌に因む文化事業で、既に2月に福井、5月に札幌で開催されており、3回目となる東京講演は、駒澤大学記念講堂を会場に開催されました。

講演会は、三祖さま御遠忌の主題「三心にまなぶ」を基に『禅に学ぶ食育“いただきます ごちそうさま”』というテーマを掲げ、講師に服部幸應先生（服部栄養専門学校校長）・千住明先生（作曲家）・若山慧子先生（前ＮＨＫチーフディレクター）を迎え開催されました。

第1部は服部先生による基調講演で、食卓こそが人格形成の場であることが懇切に説かれました。引き続き第2部は「永平寺からのメッセージ」というビデオ上映で、永平寺で行持されている食作法、食に対する考え方などが紹介されました。第3部は若山先生に進行をお願いし、服部先生と千住先生を交えての鼎談となりました。

今回、企画運営に携わらせていただく中で興味深かったのは、曹洞宗関係の大学に通う学生さんの力を借りたということです。告知ポスターは駒澤女子大学人文学部映像コミュニケーション学科の学生さんに作って頂きました。採用されたのは1つですが、それ以外の採用されなかった作品の中にも、「いただきます　ごちそうさま」を描いた素晴らしい作品がたくさんありました。また今回の会場内の音響・照明などは、駒澤大学電気美術研究会の皆さんに運営していただきました。ＮＨＫの番組制作に携わってきた若山先生のハイレベルな指示に応えようと一生懸命取り組む姿を幾度となく目にしました。

この文化講演会は第4回を10月に福岡で開催し閉幕します。三祖さまの御遠忌が、多くの人たちが家庭の食卓を見直すきっかけになることを願ってやみません。

基調講演　満堂の聴衆

訃　報

かねてより療養中でありました大本山總持寺監院・可睡斎斎主伊東盛熙老師におかれましては、6月13日午前9時27分、先住地である長野県・時丸寺にて御遷化なされました。

15日には大夜諷経が佐藤良彦老師導師により、16日の荼毘式が西村喜候老師導師により時丸寺で営まれました。

密葬儀は7月25日、静岡県・可睡斎にて営まれました。

伊東盛熙老師は、平成8年に可睡斎住職となられ、その後大本山總持寺監院職に就任。永きに亘り宗門の興隆にご尽力されました。

また、ＳＺＩ活動にもご理解をいただき、大本山總持寺での講演会や各行事に多大なるご協力を賜りました。大船観音ゆめ観音アジアフェスティバルではＳＺＩと協働の形で運営させていただいております。

スタッフ会員一同、心より弔意を表します。

なお、6月30日の大本山總持寺顧問会において、監院職に神奈川県・西有寺住職横山敏明老師が推挙され、7月7日上山されました。老師の今後の御活躍をご祈念申しあげます。

平成19年5月 監院寮拝問において

両大本山ワークショップ聴講者アンケート全文掲載

◆ 大本山總持寺において　平成20年6月16日

日本以外にも曹洞宗の寺院があるのは知っていました。しかし、ダンカン先生のお話を聞くまで、戦後に大変苦労したことは知りませんでした。厳しい弾圧を受けながらも、それを乗り越え今もなお、いくつもの寺院がハワイにあるということは、将来、曹洞宗の僧侶になる私たちにとっては、とてもホコリに思えることだと思います。また、海外では、読経の仕方、食事内容の違いがあると聞き、少しビックリしました。しかし、その国にはその国の習慣があります。全てを同じにしなくてもいいと思います。できることはやり、できないことは無理にやらなくてもよい。このようなやり方で、これからも世界に曹洞宗を広めていってもらいたいと思います。海外布教には私も以前から興味がありましたので、機会があれば、私もいろいろと参加していきたいと思います。(平成20年冬)

海外にも曹洞宗があるということを耳にしたことはありますが、どの様な活動をしているかは知りませんでした。今回の講演を聞いてＳＯＴＯ禅インターナショナルの活動が少し分かりました。仏教の輪が広がるのは良いことだと思いますが、海外の仏教は少し形が変わると聞いて、残念な気がしてなりません。それは、もしかしたら自分の中に仏教＝和という概念があるからかもしれません。仏教はもともと海外から渡ってきたものですが、何かと昔から付き合ってきたので、そのような考えが出るのかもしれません。何はともあれ、仏教の考え方が広がることは嬉しいことだと思います。(平成20年夏)

日本は昔から文化を輸入し、それを独自の文化へと進化・発展をさせている。日本の書や茶は禅宗の独自の文化から派生したものと考えられる。わび・さび・無機質に味を感じ楽しむというか香りを楽しむ文化が生まれた。
日本の仏教はその他の国とは違った味わいを見せている。中国の大仏様は金色に光っているし、石でつくられた寺院などもない。木でつくられ、木像で金色であったり、落ち着いた色もしている。文化の多様性、民族性がみられる。大切なのは、宗教のプルーラリズムであり、多様性であるがこそ、それ（宗教）がもつそのもの自体の大切さが保有されている。宗教の持つ独自性というものは、それが持つ独自性、民族により多様化している。宗教はその民族のアイデンティティーであり、自己そのものである。なので、それを否定するのではなく、認める。そのものが持つ大切さを認めて保有するのが真の宗教性だと思う。アメリカの文化になれるように仏教も変化しているように、宗教は最も人間的根幹をなすものであり、変化、受容、改宗などはなかなか難しいこともある。改宗を強制的にすることは、自己を否定するものである。迫害であると思う。歴史にはそのような過去がいろいろとある。
アメリカで禅がそれほどまで受け容れられている事を初めて聞きました。参考になりました。どうもありがとうございました。(平成20年冬)

日本の仏教はハイブリッドと言えばそうなのかもしれませんが、日本人はそれ以前に無宗教でもあるので、布教するのは大変だと思います。そんな中で布教なさっている方々は偉大だと思います。アメリカにはキリスト教が根付いており、アメリカ仏教の話は大変感慨深かったのですが、現在はどうなっているのでしょうか。21世紀にあった宗教というのも面白いと思いました。確かに聖書には科学的な要素は一切通じませんし、更に仏教が海外布教されればと思います。
日本人が第二次世界大戦で何をして何をされたのかも、自分たちはほとんど知りませんし、もっと知りたいと思いました。何がアメリカ仏教に関する歴史の本などあるのでしょうか。調べてみようと思います。先生の今書かれている本というのも、出版されるようでしたら、チェックしてみたいと思います。
向こうでのお経の読み方というのも気になります。英語の般若心経もっと聞いてみたいです。キリスト教から仏教に、仏教からキリスト教にと文化は混じり合って、ハイブリッドになっていくのかもしれません。
自分もどこかの国で布教活動に参加する機会があれば気になりますし、参加してみたいと思います。仏教を新興宗教と呼ばせるのはまだ早いと思わせたいです。(平成20年夏)

英語の般若心経は全部聞いてみたいと思う。
アメリカの仏教はとてもよい消化の仕方をしているんだなと思った。ハイブリッドという言葉がとてもいい意味だと思った。仏教が日本に渡ってきた頃もきっとこういう事があったんだろうと思う。(平成18年夏)

曹洞宗がこんなにも世界に広まりつつあるとは知らなかったです。日本では仏教離れが進み、寺院の立場は苦しくなっているという話を聞きましたが、世界の流れは逆に仏教に関心を持ちつつあるという事で、とても驚きました。平和的で柔軟性のある宗教として仏教が認められていく事は、禅僧としてとても嬉しいことであると思います。読経の仕方等がアレンジされていたりして、世界の仏教はとてもおもしろいなと感じました。米国の精進料理も食べてみたいなと思いました。(冬)

今日は本当にありがとうございました。国内のことしか知らない私でしたが、ダンカン先生のお話を聞いて、すごく感動しました。特に般若心経の英訳を聞けて、とても嬉しかったです。いろいろな話を聞けて、とても新鮮で良かったです。Thank you（平成20年夏）

当役があったため、途中からの参加となってしまいましたが、先生の講演興味深く聞くことができました。米国の仏教文化はまだまだ新興で模索状態であること、また仏教自体が柔軟性を持ち常に変化を繰り返し生き延びてきた事は、日本の今の状況を見ると大変面白く感じました。
禅と仏教がポップカルチャーとして扱われていると聞き、日本では逆にキリスト教がポップカルチャーとして見られている点から見ると、人間は常に知らない物には興味をそそられ、外来のものにひかれていくものだと感じました。
それならば日本でも今の仏教の知られていない点、埋没している点を自分たち僧侶が発見し、大衆にしっかり伝道していければ日本の仏教もまだ進化発展をしていく余地はまだまだあるし、米国仏教の良い点、柔軟な部分を取り入れていければ、日本の仏教はまだまだ良くなって行くのではないのかと感じました。(平成20年夏)

アメリカにとっては新興宗教であり、これから何か新しいものが生まれていくとするのであれば、お寺離れが進む日本ではアメリカのスタイルを逆輸入するのもひとつのアイデアなのであろうと思います。
自分の中にはおぼろげながら、イメージがあるのですが、キリスト教社会のアメリカ仏教スタイルに非常に興味がわきました。今後、僧侶になろうとする我々には、参考になる点が多いと思います。例えば、お経と音楽はもっと結びついても良いと思います。食事はベジタリアン。生活様式は時代に合わせるところは合わせたフリースタイルなどなど、自分のイメージとリンクしました。(平成20年夏)

海外の仏教文化のことなど、分かり易くいろいろなお話をとても興味深く聞かせていただき、ありがとうございました。アメリカの禅センターのベジタリアン、アメリカの精進料理のことなど食材は？（東京都）

日本語で話していただき分かり易かった。興味深かったのは、般若心経を賛美歌調で唱えるということ。さわりをダンカン先生がなさってくださったが、声明ではないが、何か自然に身体に入ってくる。異端視されるかもしれないが、日本でも取り入れても良いのではないかと思われます。(東京都)

◆ 大本山永平寺において　平成20年6月20日

ＳＺＩの講義を受ける度に、海外の仏教の隆盛を感じる。しかし、日本と海外の仏教に対する姿勢の違いにそれぞれ別のもののようにも思えて考えさせられる。(平成18年夏)

非常に貴重なお話をありがとうございました。欧米でのお経など、気になっていたことも知ることができ、今回のワークショップに参加することができて本当に良かったと思います。先生のお話をもう一度拝聴したいので、このような機会がもう一度あるよう願っています。これからも先生の活動や経験をより多くの人に伝えていただければ、曹洞宗全体の視野が更に広くなり、より良い宗派になると思います。ご活躍を祈ります。(平成20年夏)

この度はわざわざ忙しい中、永平寺へお越し頂きこのような講話をして下さいましてありがとうございました。日本の文化でもある禅文化や仏教思想が海外の方でも浸透しているという事実に大変ビックリしました。アメリカなどにも、日本風の寺院がたくさん作られ、いろいろな方々が参拝にくるという事は、とても素晴らしい事と思います。永平寺の朝の朝課でも、外国の参拝客の方々をよく目にします。このように仏教が世界中と繋がっている事に、同じ仏教徒として嬉しく思います。また、海外から見た日本の仏教や寺院はどのように映るのでしょうか？今度また機会があれば、ぜひお話を聞かせていただきたいです。これからも仏教が世界中の人々とのつながりがあることを期待しています。ありがとうございました。(平成20年冬)

海外布教に当たってオルガンを使うなど、日本仏教の具体的な変容のあり方を聞くことができ、非常に勉強になりました。鈴木大拙などの仕事で紹介された日本仏教の教理・思想と在米日本人の為の日本仏教のお寺の活動という２つの流れが、アメリカの土地と結びついて理解できました。私は信仰としての日本仏教と教理との両方に関心があり、本山でこのような講義を、大変久しぶりに聴かせていただいたことに深く感謝しています。ありがとうございました。(平成20年夏)

曹洞宗のお寺が海外にもたくさんあると知りびっくりしました。そして自分がその曹洞宗の本山で修行しているという事に誇りが持て、これからも安居生活に気を抜かずがんばろうと思いました。(平成20年夏)

日本における禅宗の立場は、とても保守的なものです。曹洞宗は750年の歴史の中で日本各地に教線を巡らし、現在では1万を越す寺院を抱える日本でも有数の宗派になりました。明治時代に妻帯が法の上で認められ、世襲に近い相続制

度が成立し、宗門の流れは安定したものとなりました。伝統に守られた曹洞宗の寺院から離れる檀家は稀で、かといって新たに檀家が増える事も滅多になく、良くも悪くも変化の少ないのが現状です。
先生がお話しになった米国における仏教、そして禅の普及についての話は非常に新鮮でした。日本ではどっしり腰をおろしている禅が、米国では走り回っているようであり、それが一昔前に歩き始めたばかりである事を想うと、改めて布教に対する意識の大切さを思い知らされます。歴史あるものの重みと生まれたての勢い。相対する2つの面を見せる禅はハイブリッドだと思います。（平成18年夏）

この度は貴重なお話をしていただき、ありがとうございました。私は以前から海外の禅センターに興味を持っていました。理由は只、海外に行ってみたい！というだけの理由ですが。　きっかけは師匠の知り合いの横山泰賢さんという方と幼い頃から長くお付き合いさせていただいてますがその方が、ずっとアメリカの曹洞宗禅センター、又はフランスの方にも務められていらっしゃいまして、話を聞くととても面白そうでした。また、師匠の兄弟弟子のイタリア人のフォルザーニ慈相という方がいまして、その方はイタリアで禅の道場を開いているのですが、昨年、そこに観光目的で訪れ、初めて海外の禅道場を見た時、何とも言えない不思議な感覚になりました。そして、もっとこの感動を味わいたいと思っておりましたところに、先生のお話を聞けて、益々、興味が強くなりました。機会があれば是非行きたいです。先生の「ホーリーディ（聖なる日）」という言葉、非常に印象に残りました。ありがとうございました。（平成20年夏）

今回の講習で、禅がヨーロッパなどで注目されていると知って驚きました。海外に曹洞宗の寺院があることは知っていましたが、その寺院の数の多さにも驚き、禅が世界中で注目されているのだと改めて思いました。
私には親族にアメリカ人の方がいる（叔母のだんなさん）のですが、その人は坐禅をしたり、寺をめぐるのが好きな人で、そんな人がもっと多くなってきたら素晴らしい事だなと思いました。貴重なお話をありがとうございました。（平成20年夏）

面白い話をありがとうございました。あまり仏教の事について知らない私にとっては、大変ためになるお話でした。私は永平寺へ安居に来る時、賢隆先生みたいにそこまでの覚悟をしてこれませんでした。まだ全然自分は甘いなと再認識しました。私もまだこれからなので、心を入れ替えがんばろうと思います。
ダンカン賢隆ウィリアムス先生、これからもがんばっていって下さい。またどこかでお会いできる事を期待しています。（平成20年夏）

外国での曹洞禅がどのような感じで広まっているのかが分かって良かったです。以前から外国では曹洞禅がどのように広まって、そしてどのようにお経を読んでいるのか興味を持っていました。知り合いでヨーロッパに本山の国際部の布教活動をしにいかれていた方がいて、その方は、外国と日本のリズムが違うためにお経を教えるのが大変だとおっしゃっていました。形は違えども、各国の読みやすいように変化していき、曹洞禅が広がっていっているとわかり、大変面白かったです。再度、海外布教に興味を持てた講演ありがとうございました。（平成20年夏）

とても面白かったです。外国の仏教にとても興味を持ちました。アメリカのキリスト教っぽい仏教を見てみたいです。英訳された経本というのも見てみたいです。Bookブディズムというのも素晴らしいと思います。永平寺での安居を終えたら、是非外国のいろいろな仏教を見に行きたいです。ありがとうございました。私もホリデー（ホーリーデー）して安居したいと思います。（平成20年夏）

この世のあらゆるものは無常だといいます。ですから私の気持ちも、今後どう変化するかはわかりませんが、今は、私はＳＺＩにとても興味があります。隆賢さんの話を聞いて、更に興味を持ちました。日本製のあらゆるものを燃やしても、経典だけは燃やさなかった。今の日本の仏教徒でそこまで信念を持っている人はどれだけいるでしょうか。私もなにがあっても、経典だけは燃やさない、そんな僧侶になりたいと思います。
私の名前も「りゅうけん」です。ただの偶然ではないかもしれませんね。私も海外に行くつもりですので、いつか会えると思います。思想は物質化します。信じていないなら、何もありませんよねHave a nice holiday.
P.S. 外見にとらわれないで下さい。私のいとこもフランスと日本のハーフで、見た目はフランス人ですが、私はあいつは日本人でしかないと思っています。ただ、外国人に見えるといっているだけです。結局、内面で人というのは決まってしまいますよ。（平成20年夏）

イギリス人の父親と日本人の母親の間に生まれたにもかかわらず、自分の信念を貫き、得度までして仏教徒になったことは、一般の人にはなかなか真似できない事だと思いました。並びに、海外にもたくさんの曹洞宗信者がいるということを初めて知り、とても勉強になりました。（平成20年夏）

仏教、曹洞宗が国際的に分布されてきていることに、非常に興味を持ちました。それに伴って、他宗教との関わり合いが重要になってくると感じました。互いの宗教を認め合うように我々は勤めなければなりません。そして毎日を心のholidayにできるよう、修行に励みたいと思います。とてもきれいな日本語で聞き取りやすかったです。貴重なお話しをありがとうございました。（平成17年夏）

アメリカにおける仏教への関心は、２つの事柄から起こっている事を知りました。１つは明治期における日本人の移民、２つには仏教書や美術品によって仏教が広まったということです。現在では世界各地で僧堂があり、修行をしています。また布教師を海外に派遣しており、世界における仏教の役割が広がっていることも良いことだと思います。その反面、国内では信仰心が失われていると言われています。しかし、世界に向けて発達出来る宗教を持っているので国内でも布教をしていけたらと思っています。
ダンカン先生は長野のお寺で得度を受けていることで、身近に感じました。話の中にもそのことに興味を持てました。海外における布教はその土地によって異なりますが、その土地で法要や儀式について問題が生じているようですが、そこでの応用等で海外に通用する仏教が広まっているので、これからも布教師続けられると良いと思います。また心の拠り所としての宗教をまず国内から発進していかなければと思っています。これからも益々の活動に心より応援致します。合掌。（平成17年夏）

今、世界中に曹洞宗の寺院があると知り、改めて仏教が広がっているんだなと感じました。そしてダンカン先生のような佛教とは無縁のように見える人をも巻き込んでしまう佛教の大きな魅力を改めて感じとりました。
今まで自分は日本や中国、インド以外の仏教の様子が詳しくは分からなかったので、アメリカやヨーロッパで仏教や禅が展開されているのに何となく違和感があったのですが、先生が仰られた“Accultavation”という単語で、それまであった違和感が無くなりました。その場に合わせて変化するというのは、言葉では簡単な説明ですが、同じような意味で「無常」という単語に置き換えれば、全てうまくつながりました。
異国の地で変化する仏教こそ本来の仏教のあり方なのではないかと感じ、また無常だからこそ人々を引きつけてやまないのでは無いでしょうか。新たな発見ができたので、良い講義をありがとうございました。（平成19年夏）

海外で出家された人の方が、仏道を求める気持ちが強いと思います。日本の場合だと多くのお寺が世襲制になっていると思います。全員が全員とは言いませんが、資格を取ってしまえば住職はできます。家がお寺だと入る寺も探さなくても良いですし、変な安心感があるのではないでしょうか。今の永平寺でも古参が下の者に甘すぎです。間違ったことをやっていても見て見ぬふりをしてしっかりと叱る人が少ないです。確かに叱る事は疲れるし、面倒臭いですが、一年目の時は誉められる事などほとんどありません。叱られてなんぼです。その方が本人のためになるのです。海外に目を向けることも大事ですが、まずは自分たちの足下を見ることが先では無いかと思います。「脚下照顧」ですね。（平成18年夏）

特別講義ありがとうございました。本日の講義を拝聴してアメリカ仏教の歴史を私なりに理解することができました。真珠湾攻撃からアメリカ在住の日本人の生活、仏教への信仰心、それから収容所での生活、人参で仏像を彫ったとか、収容所に行く前に仏教経典だけは捨てることができなかったとか、当時のことがよくわかりました。
現在のアメリカにおける曹洞宗の布教活動は、日曜日になると子ども達を集めているとか、今まで知らなかったことを知る事ができました。道元禅師さまの教えは素晴らしいのですので、せっかく古人が築きあげたものを守っていけるように、これから布教活動をし、そして行持ていかなければいけないと思います。その土地土地、風土にあわせて布教し、高祖さまの教えがいろいろな人に伝わればと思います。まずはしっかり永平寺で学ばせていただこうと思います。本日は本当にありがとうございました。（平成17年春）

アメリカと日本との間でお経などのリズムが違っているというのは、聞いていて凄く驚きました。とても良いものを聞かせてもらいました。またアメリカの仏教の歴史についていろいろと教えていただきありがとうございました。（平成20年冬）

この度、ダンカン先生のお話を聞くことが出来、とても光栄に思いました。私がダンカン先生のお話で一番興味深く聞き入ったのは、最後の大衆の方からの質問へのご返答でした。ダンカン先生は、お父さんがイギリス人で、お母さんが日本人のハーフで、自分は一体どちらの人間なのか、自分とは一体誰なのかという事で悩まれていたと言っていましたが、その話を聞いたとき、父も母も日本人の私ですが、なぜかとても恐くなりました。日本にいてもイギリスにいても、自分は他人からしてみれば外国人に見られるのだという気持ちになってしまうのは、とても辛いことだろうと思いました。しかし、ダンカン先生のお師匠さまがダンカン先生に言われた言葉を聞いて、とてもすっきりしたというか、安心した気持ちになりました。「イギリス人にも日本人にも傾くな。」素晴らしい言葉だと思いました。まさに「空」そのもののような気がしました。私もダンカン先生のお師匠さまのような素晴らしいお坊さんになれればと思いました。貴重なお話をどうもありがとうございました。（平成20年夏）

仏教は移動することによって、それ自身も変化し、仏教が伝わった土地にも何かしらの変化を起こさせる。このようなダンカン先生の考えに感銘を受けました。今日のような宗教と宗教がぶつかり合う宗教ナショナリズムが溢れる時代にＺＥＮの寛容さ、その土地に適応する能力は注目すべき物だと感じる。このような精神が、宗教ナショナリズムの強いイスラム教やキリスト教に浸透することができるのか、非常に興味深いことだと思いました。ダンカン先生ありがとうございました。（平成20年冬）

ＳＺＩの内講を受けさせて頂いて曹洞宗の新たな一面に触れることができた。

各国によって解釈は少しずつ異なる部分、理解しきれない部分はあるだろうが、同じ「人」としての悩み、考えに共通する部分があるから、世界各地に曹洞宗が布教しているのだろう。以前は「曹洞宗＝日本だけ」という考えが私にあった。しかし実際は広い世界で共通していた。私自身も1つのことに対しいろいろな見解を持ち、物事を広く捉え、いろいろなものを見ていきたいと感じさせられた。有意義な時間を与えて下さったダンカン先生に感謝したい。合掌（平成20年冬）

仏教というとインドから日本までのアジアを中心に広がっていて、他の地域ではあまり伝わっていないものだと思っていました。しかし今回のＳＺＩの内講で日本からさらに東に伝わり、アメリカやヨーロッパで広まっているのを知り、禅の心は世界共通のものになってきていることを知りました。これからももっと禅は広がっていくと思いますが、私ももっと世界に目を向けて広い視野を持ち日々精進していきたいと思います。合掌（平成20年冬）

貴重なお話をありがとうございました。21世紀の宗教はどうなっていくのかも、滅びていくのか、生き残っていくのか、生き残っていくとすればどういう形が望まれてくるのか…。諸宗教の対話ということもいわれているが、果たして本当にそういうことは可能であるのか。いわゆる原理主義という排他的思想が支配的になってくれば、世界は益々惨憺たる状況になってしまうでしょう。今一度、“人間存在”への問いかけが切実に起こって来なければと思います。そうした意味において仏教の説く自然観、特に日本仏教は勝れた見方を提供してくれるでしょう。また禅は“身心一如”の考え方から“行”という視点により個人の救いになっていく可能性が強いと思います。アメリカでも日本でも昨今、人格障害からくる事件としか思えないような事件が続出していますが、1つには家庭の中で宗教的な習慣が希薄になってきたことが大きな要因と思えてなりません。どんなに医療が進んでも、人間は必ず死を迎えます。延命治療が進めば進むほど、“老死”といった問題は深刻になってきます。結局、こころの問題に行き当たってしまいます。人類はもっと謙虚に穏やかに生きていく道を求めていかなければなりませんが、仏教はその意味でも大きな示唆を与えてくれるものと思います。先生の益々のご活躍を心より念じております。（本山侍真）

キリスト教や仏教に比べて『禅』というものの世界的な広がりがようやく見られてきたのではないかと思いました。禅の考えを多くの人に知ってもらいたいとは思います。自己の存在を確かに持てなかった人が、禅の考えで救われる、素晴らしい事だと思いました。（平成19年夏）

歴史的な仏教、アメリカにおける発展、現状など学術的な面でもアメリカにおける移民の方々の宗教に対しての熱い思いを感じられた面でも、頭と心でとても刺激を受けた時間でした。宗教が広がっていくということは、私たちが布教していく際、大いに役立つことであり、また、熱い宗教に対する気持ち、そのような人がいることに自分の安居のあり方、もっと精進しなければ、と熱心な気持ちに答えられる人でありたいと思いました。「より良い生き方をする」ということは、仏教を学ぶことであるとは思いますが、違った観点や切り口で客観的に、また他宗教や慣習の立場から見ることもこれからの時代は必要になってくると思います。他の習慣の中に入っていく場合もそうですが、現代世界、日本においても社会の流れは目まぐるしく変わっています。仏教も常にハイブリッド、変化していかなければならないと私は考えています。

これからの自分、安居僧として、寺院をこれから運営していくことについて等考えることの多い、とても有意義な時間でした。ダンカン先生も、とても熱い僧侶だと感じました。仏教によって自らを見出し生きているとても素敵なことだと思います。私も今は迷って、悩んで、苦悩する日々ですが、安居を通して少しでも自らの道を見つけたらと思っています。ありがとうございました。（平成19年夏）

戦争時にＦＢＩ等の調査を受けて日本に関する物が全て燃やさせられたという話が印象的だった。趣味で持っていたのではなく、信仰心から所持していたのにそれを燃やした時の覚悟は相当なものだったと思う。今もカリフォルニアの土地に埋められた経典やアメリカ仏教の歴史が記された物は是非、発掘されて欲しい、そうすれば埋めた人の気持ちも多生は報われると思う。

また、1942年収容所に入れられてしまった人たちが何とか身近になる物だけで花まつりをしようとした話も大変良かった。私たちも作られた物に対して礼拝の対象とするのではなく、ないならそれを創意工夫して作り出すくらいの深い信仰心を身につけたい。（平成18年夏）

私は永平寺に来る前に戦争のこと、日本で起こった戦争に興味を持った時があり、辺見じゅんさんの本などいろいろ読んだことがありますが、それらは日本からの視点、日本兵からの視点でありました。今回先生がお話を下さったアメリカに在住している日本人がどのような状況になったかなどは本にも書いてあったのですが、それも日本兵からの視点で、一般の人々の事はあまり書いていなかったので、とても興味がわきました。しかし、話を聞くと、とても悲しくなりました。

ＦＢＩの強制捜査などで銃が突きつけられた親を間近で見た少女、必死で悪くないと仲介する話は心が痛みました。しかし、その親の人の仏教に対する信条、熱意は今の僕にはない気がします。そのような信仰心をもっている人もいるということに、改めて気付かされました。時々、仏教は今の現代には必要が無いと感じる事はありますが、それでも信仰している人の話を聞くと何か仏教に惹かれるんだろうと思います。それをもっと考えていきたいと思います。また、私の師匠の兄弟弟子の方もハワイで布教しているので、いつか師寮寺に帰ったら連絡を取り、いろいろ聞いてみたいと思いました。（平成19年夏）

その土地、その土地で同じ仏教でも形が変わってしまったら同じ曹洞宗でも同じものであるといえるのか？国際布教はとても大切なことであるが、布教を第一に据えるともはやそれは宗教ではない。宗教は人が求めることから発する。ひとつの出会いのようなものでははないか。宗教における人種差別や偏見などはいきすぎた布教活動によるものが少なくない。また、布教活動の裏には金銭の流れがあることが少なくない。現代的な宗教というのは必要とされているのか？今と昔とでは宗教と同じものを同じ表現で表してはいるが、全く異なるものとなってはいないか？現代における宗教者は布教を考える前に、宗教という本質的なものを今一度考え直す必要があるのではないか？必要がないと認められるものであるとしたら、宗教として無理に現代社会に残す必要は全くなく、学問として残せばよい。宗教者は一体何を恐れているのか？（平成19年夏）

貴重なお話ありがとうございました。日本は最近、禅というものから遠ざかっていっているように思います。このように国際的に禅を広めていくことが今の私たちにとっての課題ではないかと感じました。（平成18年夏）

大変興味深く受講させていただきました。禅がいかにしてアメリカに伝わったのか、その伝わり方が２通りあったこと、特にヨーロッパからの伝わり方は面白いと思いました。自分はNYに２年居たことがあり、アメリカ人たちと多く接する機会がありましたが、禅に対する関心の高さは感じていました。ただ、当時の自分に知識があまりなかったので、アメリカでの状態はわかりませんでしたが、今回の受講で禅が確かに広がっていることかわかり、いつか自分もアメリカで参禅してみたいと思います。（平成20年夏）

海外で仏教（禅）の教えが広く信仰されていることに驚きました。もしかすると外国の方のほうが今現在の日本より、仏教の教えというものが強く認識されているのかもしれないと感じました。（平成20年夏）

今回の講義が私にとって海外の仏教を初めて知る機会でした。海外の仏教がどのように広まったのか知ることができて、少し興味が沸きました。

今回のＳＺＩ特別講座を受け、アメリカにおける仏教についてよく知ることができました。アメリカでは先に根付いたキリスト教のミサ等の文化を取り入れているとのことでした。そのほかにも、アメリカの般若心経などとても斬新で興味を持ってお話を聞くことができました。ダンカン先生へ、今後益々のご活躍に期待しております。（平成20年夏）

曹洞宗が世界中に広がっているということが、今日の講習で知ることができました。お経も英語で読んだり、教会で行われている賛美歌のような唱え方があることを知りました。（平成20年）

ダンカン先生のお話を聞いて、仏教が日本だけでなく、多くの国にも信仰されていることがわかりました。これからも仏教を一人でも多くの方に知っていただけたらと思います。ありがとうございました。（平成20年夏）

言葉や文化が全く違う国に自分たちが修行して、求めているものを、同じように求めて修行している人がいることを知り、驚きと感動を覚えました。自分は英語はほとんど話せないですが、自分たちが求めているものは、言葉ではいうことのできないものであると思っているので、修行を積み、何かを得るものがあった時、外国の人と一緒に話し合えるような未来が訪れたらとてもうれしいことだと思います。そうなったときに、自分がそれを快く受け入れることができるように、今回の講義を役に立てていきたいです。（平成20年夏）

非常に興味深いお話を聞かせていただきました。特に向こうのお経の唱え方の違いには驚きました。最近の日本の若い世代の宗教離れが心配されているようですが、海外の方を惹きつけられるその活動内容をもっと詳しくお聞きして、今後いかすことができたらと思います。（平成20年夏）

今回、ダンカン先生のお話を聞いて、禅宗が全世界、特にアメリカで注目されていることを知りました。日本語のお経をそのまま唱えるか、英訳して賛美歌のように歌にして唱えるかという問題は、興味深いものがありました。日本の若者は、宗教に対してどうなっていくのか、曹洞宗も含めて不安があります。今回は貴重な講義をしていただきありがとうございました。（平成20年夏）

歴史的背景をふまえて、現在までのアメリカ仏教の流れを、わかりやすく教えていただきました。戦前からアメリカに仏教があったことを知り、少し興味が湧いてきました。（平成20年夏）

海外での布教が広がっていることは海外への布教伝道に尽力された方々、興味を持ち、それを受け入れる国の宗教文化の進歩だと思います。特に一神教は他の宗教を一切受け付けない特異性が強すぎた面があったと思い、それが自由になってきたことであると思います。しかし、日本は混ざりすぎてよい面もあるだろうが、悪い面も少なからず顕在していると思います。意味もわからずただ祝う日だから、みんなしてるからとか、せめて何があってどういう意味で行われているかを意識してみると、変わってくることがある、気づくことがあるかもしれないです。したがって日本の宗教者も広く知識認識を持たなくてはいけない時代になっていると思います。（平成19年夏）

海外での仏教の布教、仏教の活動は、移民仏教から学問的な仏教、そして実際の行としての仏教など、さまざまな要素、変遷を経て今日に至っており、また、今日も布教活動において色々な試みがなされている。そうした海外での先人たちの努力を検討することによって、現在のさまざまな問題を抱えていると言われる日本仏教界に還元がなされるのではないだろうか。（平成18年夏）

とても興味深いお話をありがとうございました。私も日本の中でさえお寺の社会的役割が変わってきたように思います。世界での役割も変わっていくと思います。アメリカの人は思想や人の意見にはとても関心を持った人たちだと思います。その中で世界に受け入れられていく最高の仏教をもって広めていけたらと思いました。本当にありがとうございました。（平成20年夏）

今回のダンカン先生の話を聞いて、改めて宗教という物の人々に与える影響力の強さという物を感じました。日本でもキリスト教やイスラム教が布教しているように、アメリカをはじめ全世界に仏教（曹洞宗）が布教していることを知ることができ、とてもためになる講義でした。私はよく、「この世から宗教が消えたらどうなるのか」と考えることがあります。どこの国でも人々は神や仏を信仰し、頼り、自分に苦しいことがあれば、それらに願い事をしている。宗教がなくなれば、争いが起き、世界は大変なことになってしまうと思う。やはり宗教というものはとてもつよいものだと改めて思いました。また先生は、長野の広沢寺の小笠原先生のもとで得度されたと聞き、ビックリしました。私の寺は長野の松本市にあり、私の寺の本家が広沢寺ですので、小笠原先生にはよくお目にかかっていますので、とても親近感が湧きました。よく松本にはいらっしゃるのでしょうか。とてもいいところですので、足を運んでみてください。今回は本当にありがとうございました。（平成20年冬）

私のいとこは一時期、イタリアで布教活動をしており、私もあこがれていたので、とても勉強になりました。まず思っていた以上にたくさんのお寺が海外にあることに驚きました。私もいつか永平寺での修行に区切りがついたら、ぜひ行ってみたいと思いました。まず言葉を勉強します。（平成20年夏）

「禅」が日本だけの禅ではなくなっているということを実感しました。「禅」を日本から世界へ広げて行くことがこれからの禅僧の役目のひとつになることを学ぶことができました。（平成20年夏）

仏教東漸と聞いて、インドから日本にいたるまでの過程しか思いつきませんでしたが、確かに日本からアメリカ・西洋へと東漸していることに気付かされ、感銘を受けました。またAcculturationとResistance to Acculturationの間で仏教をどう伝えるか、先人たちの苦労や工夫があったことに関心を持たせていただきました。現在、お経の唱え方のcodeやrhythmの論争の話は、大変興味深いものでした。現在日本でも般若心経の現代語訳の本が多く出版されたりお経をわかりやすい言葉で唱えようという動きがあり、若い世代にどう仏教を伝えるかということに通じると感じました。この若者に伝えていくにあたって、hybridな状況が生まれてくるので、先人たちの工夫を参考にしてこれからの布教に生かしていければ、仏教は若者にしっかり伝わっていくのではないでしょうか。（平成20年夏）

今回、海外、特にアメリカでの仏教というものに初めて目を向けてこの講演を聞き、アメリカでの仏教というものはどういう存在なのかということを知りました。アメリカにはもともとあったキリスト教から仏教の教えに変わってきているというのはすごい事だと思いました。
また、戦前・戦時中にもアメリカに仏教というものがあり、特に、日系人の方が信仰されていたみたいだが、アメリカに布教されていたというのは、すばらしい事だと思いました。すばらしい講演をありがとうございました。（平成20年夏）

話を聞いてとてもためになりました。仏教のこれからのあり方について、もっと話を聞きたかったです。これから50年後には仏教はどのようになって行くのでしょうか？（平成19年冬）

貴重なお話をありがとうございました。海外での曹洞宗の活動に興味を持っていたので、有意義に聞くことができました。海外で曹洞宗がどのような形でその国に融合しているのかをもっと詳しく聞ける機会があれば幸いです。お経の読み方など日本的な言い回しと西洋的な言い回しの２種類の読み方があったりとまだまだ知らないことだらけだと実感しました。深く曹洞宗そのものを勉強しようという意欲が湧くようなお話をありがとうございました。機会があればまた話をお聞きしたいと思います。（平成19年冬）

諸行無常。仏教も常に同じではなく、世界に広がっていることをこの講義を聞いて実感しました。（平成19年夏）

外国の仏教、又、曹洞宗の活動が学べてとても勉強になりました。また、外国での仏教の布教活動に対してこの内講を通じて深い関心を持つことが出来ました。
そして、宗教というものが、社会や歴史ととても、密接に関係していることが、戦争中のアメリカの日本人の話を通じて再確認する事が出来たと思います。
この内講で仏教が、曹洞禅が世界でどのようなものなのかがわかり、もっと世界に目を向けることが、これからの僧侶として必要とされている、そして、布教の困難さ、大切さを知ることが出来ました。（平成19年）

今回のＳＺＩ特別講義は大変貴重な体験となりました。印象深かった話は、般若心経の読み方の話です。日本人として普段何気なく読んでいる般若心経も、国境を越えれば色々な読み方があるのだと感じました。受所という配役を頂いている為、よく参禅研修に来山する外国人の方は、どのようにお経を読んでいるのかと思っていましたが、それも納得出来たような気がします。又、普通に英語で読むのや、讃美歌のようにリズムをつけて読む読み方をウイリアムス先生が唱えてくれたときには、同じお経とは思えないほどの感動を覚え、また、本当の讃美歌を聞いている気さえしました。これからも教授として、又、僧としてもがんばっていって下さい。　合掌　（平成19年夏）

貴重なお話ありがとうございました。大変興味深く拝聴させて頂きました。私は特に、ダンカン先生が最後にお話になられた、自分が出家を決意した理由というのが気になりました。
というのも昨今外国人の方で仏門に入られる方が多くおられますが、そのような方々はいったいどのような考えをもって出家されているのか非常に興味があったからです。
ダンカン先生は自身がハーフであるということからの悩みに起因していると言われ、それが仏教の「空」の思想で解消したと話されました。
若くして、ある意味では若干の悟りを得たのではないかと感心しました。今度は本当にありがとうございました。　合掌　（平成20年夏）

今回の先生の話を聞かせて頂きましてまず一番に思ったことは、おもしろかったです。ただおもしろい訳ではなく、考え方が斬新というか、私がお話を聞かせて頂いてきた中では、とても特徴がありました。ハイブリッドジャパンという考え方がすごく興味を持ちました。根本とするところは同じだが、その時代の風潮や国々でその国の仏教がある。中国なら中国にあった思想。日本なら日本に合った思想、アメリカなら、アメリカに合った思想がある。そして、その土地土地の人々は、仏教に対してとても強い関心をもっていることを知りました。私もこの仏教、曹洞宗に対して強い信念をもっているので、すごくお話を聞いていて共感いたしました。（平成19年夏）

内講が始まり、ダンカンさんが出てきた時普通の外人にしか見えなかったが、日本や、日本の仏教についての知識が私なんかよりもよくあり、すごいと思った。話を聞いてアメリカ等の外国で仏教が普及していることを知った。外国での仏教の普及が大きいという事は、やはり私達も、もっと外の事を見ていかなくてはいけないのだなと認識した。（平成19年夏）

海外寺院ガイドブックを見させて頂きましたが、こんなに多くのお寺が海外にあるのにおどろきました。日本風の建物もあれば、その土地の建物、キリスト教の教会のような建物もあり、ぜひ自分の目で見てみたいと思いました。海外に行く機会があれば、ぜひ足をはこんでみたいと思います。
先生が唱えて下さった海外バージョンの般若心経を聞けてとても良い経験が出来ました。海外の方はどうやって唱えるのか知らなかったので、聞けて良かったです。
私は今まで、キリスト教が主な宗教として広まっている中に、仏教が入り込めるのかと思っていましたが、海外の方でも多くの方が、仏教を受け入れ、禅を実践している人がいると知りました。ＳＺＩの方たちの働きなど、今まで増えてきたように、これからの時代、どんどん多くの国へ禅が広まって行くのではないかと感じます。大変貴重なお話ありがとうございました。（平成19年夏）

dislocationという言葉は、諸行無常というふうに訳せると気付いた時、目からウロコが落ちたような気持ちになりました。賛仏歌というものを是非聞いてみたいと思いました。海外の布教師の方々は本当に強い帰依の心、信心かあるんだなと、とても感動しました。（平成19年冬）

仏教は紀元前から起こり、現代まで続き発展してきました。そんな長い時間の中で、今現在、長い歴史から見ると今まさに、日本から、又はヨーロッパ、又は他からアメリカに仏教、禅が注入というか受け容れられ始めている変革期に私は（私たちは）立っているのですね。キリスト教やヒンドゥー教等すでに全世界に伝わっているんじゃないのかなと思う宗教はありますが、今、禅が受け入れられ、求められている。これはひとえに布教師の方々の力のお陰であると思いはしますが、現代に禅という心の落ち着き場所が必要とされているあかしでもあります。それも、個々の落ち着きであります。これは逆に言ってしまえば、悲しい現状をも現していると思います。しかし、それによって禅の世界が開け、わかろうとしている人々がいるのもまた事実です。今は先生のようなグローバルな人が大切になります。曹洞禅を求めている人や、まだ知らない人々のためにも、自分自身もこの変替期に、どう一人の僧としたら力になり、未来につなげられるのか、努力する必要があると感じました。（平成19年夏）

海外に曹洞宗のお寺があるということは存じておりましたが、「海外寺院ガイド」を拝見させていただき、予想以上の寺院があることに、とても驚きました。また、お話を聞かせていただいたり、写真を拝見させて頂いたりして、様々な取り組みが行われていることに興味を持ちました。また、海外でのお経の唱え方を聞かせて頂いたのですが、その発音の違いにもとても興味を持ちました。また機会がありましたら、他のお経も聞かせて頂ければと思っております。なかなか難しいかもしれませんが、日本と海外の雲水が集まって短期間の修行を共にしながらお互いの国の理解を深めたり、楽しく交流ができましたら、さらに活発な活動ができるのではないだろうかと感じています。貴重なお話しをありがとうございま

した。（平成20年冬）

私は以前から海外の曹洞宗の寺院があることは知っていましたが、今回のＳＺＩのお話を聴き、ガイドブックを見て、こんなにも多くの寺院があったことを知ることができました。中学生の頃にハワイに行き、初めて海外に曹洞宗の寺院があることを知って以来、今までずっと興味がありました。今回、ダンカンさんのお話を聴き、曹洞禅が広まりつつあることを知り、大変うれしくなりました。私も国際布教に興味がわいてきましたが、まだまだ知識不足なので、なかなか一歩が踏み出せないですが、永平寺でたくさんの知識を身に付け、海外にも目を向けてみたいと思いました。
話は変わりますが、講義の翌日に私が諸堂拝観をさせて頂きました。私は今年の３月に上山いたしまして、知識が浅い中ご案内を勤めさせてていただきました。お聞き苦しい点があったかと思いますが、聴いていただきありがとうございました。（平成20年夏）

私はこの講義を受ける前は、その国毎の考え方によって宗教は変わっていくものだと思っていました。なので私も真剣に修行し、違う国の方々といろいろなお話をしたいと思います。（平成20年夏）

たいへん興味深く拝聴させていただきました。ダンカン先生が仏道に入られたきっかけや、先生の仏教に対する考え方は、本当に共感できました。日本文化である仏教（道元禅）を欧米に輸出でき広めることが結果としてできるのであれば、それはたいへん素晴らしい事であると思います。道元禅師が中国から禅を持って来て日本に伝えたように、先生がアメリカへ仏教の素晴らしさを伝えられていることに、深い感銘を受けました。（本当は私自身がこのようにするべきだとは思いますが）本来、眠い眠い夜の講義ですが、あまり眠くならず本当に有り難い講義でした。（平成20年夏）

海外に対する曹洞禅の特別講義をしていただき、また、資料をいただきありがとうございました。曹洞宗が海外布教をしていることは知っていましたが、13ヵ国85ヵ寺もあるというのは知りませんでした。85ヵ寺も在籍していることに驚きました。講義の際、お経の読み方をどう読むかという問題があると聞きましたが、無理に日本の読み方に合わせる必要は無いと私は思いました。その地域の人が馴染み易い読み方で良いと思います。（平成20年夏）

面白い話をたくさんしていただきありがとうございました。英語の般若心経とか歌のようで興味深かったです。曹洞宗がいろいろな国と交流を深めているのは以前からの内講で知っていましたが、具体的になにをやっているのかまではあまり知りませんでした。海外の僧堂でも般若心経を読むことには非常におどろきました。また機会があれば、話を聞けたらと思います。（平成18年夏）

最後の方で、ハーフであることで苦労したというようなことを言っていましたが、自分は何なのか、自分が何のために生まれてきたのかというような疑問を永平寺安居２年目位から多々思う機会がありました。ダンカン先生にとっての仏教が答えになったのを羨ましく思います。永平寺に安居し、１年目が終わってから責任が重い役に当たるようになり、失敗をする度に、自分は何のためにここにいるのかというような深いところまで考えてしまうようになりました。今も永平寺に安居中で仏教に近いところ場所にいますが、未だ答えは見つかりません。先生にとっての仏教のようなものを見つけられるよう予定では残り半年の安居生活ですが、打ち込んでいきたいと思いました。（平成18年夏）

興味深い話でした。宗教というものは文化でもあり、伝わった国々で独自のとらえ方、変化をしているということが分かった。海外で布教するには、相手国の文化や生活、習慣等を考慮してオリジナル（原形）をそのまま伝えたり、押しつけたりするのではなく、相手国に合ったスタイルにするのが良いと感じた。（平成17年）

テンポの良い、英語版の般若心経に趣きを感じました。また、ダンカン先生が仏教の道に入られた自分の生い立ち、中道のお話しに感動致しました。（平成18年夏）

何故、師として小笠原隆元師を選ばれたのでしょうか？“自分という者はないオープンであり空である”私は空という概念が未だに分かりませんが、無我であるというところからつなげてみたいと思います。アメリカの大学で講義なさっている方が、20世紀にあっている。アメリカのマジックである。神を信じないと始まらないというのには、当てはまらないという風に言っていたところを良い点と信じ、仏教を見ていけばと。
ハワイ～西海岸へと伝わった仏教者のいる仏教と、ヨーロッパ～東海岸へ伝わった“本の仏教”。植民地政策などによって伝わり方は違うが、仏教者がいなくても、伝わっていることを深く受け止め、真剣に仏教の世界をまわりへ伝えようと考えました。（平成18年夏）

海外（特に北米）における曹洞宗の歩について良く理解することが出来る良い機会になりました。いつか海外の拠点に行ってみたいと思いました。ダンカンさんの日本語、とても上手で聞きやすかったです。（平成20年冬）

まえから海外における仏教というのに興味があり、ダンカン先生のハイブリッドジャパンの話を聞き、日本と海外のお互いの仏教の良いとこ取りができれば良いと思いました。日本で仏教というとほとんどの人が死者を弔うためだけのものになっていると自分は思います。そうではなく、生活の一部としての宗教、ただ坐禅をするとか、御詠歌だけをするなど仏教のもっている固いイメージをなくし、気軽に入っていけるような仏教…寺というものができてもいいと思います。（平成20年夏）

たいへん興味深いお話で、楽しく拝聴させていただきました。私の父がドイツ普門寺等に行って外国のことは関心があり、外国の事情が聞けてとても良い経験になりました。海外布教というよりも、海外での仏教というものに携わってみたいと思っておりますので、ご縁があったらよろしくお願いします。（平成20年夏）

非常に貴重なお話ありがとうございました。仏教という一宗教が国際交流の一端を担っている今、僧侶である私たちが、何をしなければならないか改めて考えさせられました。先生のようにしっかりと自分の言葉で仏教を伝えていけるように、日々精進して行きたいと思います。（平成20年夏）

本日の講義を受けさせていただいて、自分がこれから僧侶として社会に何を示し、何を布教していったらいいのか、考えさせられました。現代の情報化社会の中では、簡単に海外の情報を得ることができるようになり、世界の宗教の事情や問題点などをリアルタイムで知ることができる中で、そういった広い視野をもって何をするのかが自分にとって、社会にとってベストなのかをしっかり考えながら宗教活動をしていくことが大事なのではないかと思いました。（平成20年夏）

たいへん貴重な話をありがとうございました。今回のお話しの中でも、「禅」の国際化、曹洞禅の海外順応における課題をいくつか挙げておられましたが、私は「食事作法」についても課題が存在すると思いました。応量器の中でも「はし」は東洋の文化ですし、海外の国々のどこでも箸を用いることの方が良いのか、逆に各国の文化に合った食器を用いて食事をすることの方が良いのか、意見の分かれるところだと思います。また、進退の不自由な方への坐禅の適応ということにも関心を待ちました。「禅」を全ての人に有益となるものとするためには、この他にも多々問題があると思いますが、その一つ一つを解決していく努力が、我々には必要なのだと実感しました。（平成20年夏）

今回は、とても勉強になる話をありがとうございました。移民の人が今の日本を心から信仰していたということを話で聴き、私は思いました。経典などを火に入れないで埋めてしまうなど、今の私でもその立場に立った時には出来ないと思います。カリフォルニアの土地を掘って見つけ出したくもなりました。（平成20年夏）

曹洞宗が海外布教をしていたのは知っていましたが、海外にもたくさんの寺院があるのは知りませんでした。以前、雑誌で弟子丸泰然師の特集を読んだことがあり、フランスなどには泰然師が創った寺院がいくつかあるのは知っておりました。ですが、アメリカ西海岸に多くの寺院があるのは渡米した日本人が心が安らぐために創られたかと考えと、信仰の意義という物を考えされられます。
本山安居を終え、師寮寺に戻った時には、ＳＺＩのような他文化交流にも積極的に参加させていただきたいと思いました。貴重なお話ありがとうございました。（平成20年）

海外にたくさんの曹洞宗のお寺があることはあまり良く知りませんでした。毎日がholidayだと思って修行に励んでいこうと思います。とても聞きやすいお話ありがとうございました。
お経が海外では違ったかんじのものとして読まれているのは初めて知りました。それはとても良いことだと思います。核となることが伝わっていけば問題ないと思います。なぜなら本当に興味を持った人ならば、きっと本当のお経も読むようになるでしょうし。もっと多くの方に知ってもらえればよいと思いました。（平成20年夏）

曹洞宗の国際布教が100年の歴史の中でアメリカを中心に広がっているということをガイドブックを見ながら知ることが出来ました。アメリカの方が受け入れてもらいやすいのでしょうか。また、言葉の違いを他国の人に受け入れてもらうために試行錯誤しながら布教活動をしているということを先生の講義からお聞きし、他国の人に受け入れてもらうまでには、時間と根気のいることだと思います。布教という気の遠くなる活動と、それに従事している方々のご苦労が伝わってきました。
それからこの事を書いてよいのか悪いのか迷いましたが、ご無礼を承知で書かせていただきます。ダンカン先生はハーフの立場で仏教・宗教を考えることによって日本人とは違う面を仏教に見出したのですね。本当に羨ましい限りです。ハーフということを最大限プラスに利用することによって、生活スタイルを確立されたのだと思います。少しだけ私の自己紹介をさせて頂きます。私は在家から僧侶の道に進みました。そのため、この永平寺に来てとまどいながら修行に励んでおります。ただいま44歳のおっさんです。また先生の講義を聴ける機会があれば…楽しみにしてます。ありがとうございました。（平成20年）

とてもよいお話でした。また聞きたいと思います。ありがとうございました。（平成20年夏）

SZI express

会費納入者・創立15周年特別募金納入者・塔婆供養で植林支援協賛者・賛助金納入者名簿

ありがとうございました。
大切に使わせていただきます。

■ 会費納入者ご芳名

2008/2/28 ～ 2008/7/31
（順不同・敬称略）

北海道　中央寺
北海道　禅昌寺　村上直文
北海道　長福寺　長尾龍心
岩手県　清雲院
岩手県　清水寺　髙田三雄
岩手県　長福寺
岩手県　宝積寺　田村優子
岩手県　東海寺
秋田県　自性院　鈴木道雄
秋田県　歓喜寺　堀口良允
秋田県　天竜寺　八島国雄
秋田県　大川寺　棟方宣之
秋田県　円通寺　近藤俊貞
秋田県　松庵寺　渡辺紫山
秋田県　永泉寺　寿松木宏毅
秋田県　満福寺　伊藤道人
宮城県　功岳寺　関弘爾
宮城県　玄光庵
宮城県　秀林寺
宮城県　東北福祉大学
宮城県　秀麓齋　長澤信幸
宮城県　洞雲寺　千田幹雄
宮城県　大満寺内　佐藤透光
宮城県　洞林寺　吉田俊英
宮城県　耕田寺　酒井正智
宮城県　城国寺　菅原英州
宮城県　洞昌寺内　奥野秀典
宮城県　龍角寺　赤間直道
宮城県　天雄寺
山形県　慶松寺
山形県　宗伝寺　蓮池泰乗
山形県　般若寺　藤川享胤
山形県　佐藤孝子
山形県　善寶寺
山形県　盤昌寺　大法良典
山形県　見竜寺　池田好雄
山形県　延命寺　宮崎拡行
山形県　宝泉寺　采川道昭
福島県　安禅寺　高山正勝
福島県　昌源寺　立花純孝
福島県　円通寺　吉岡棟憲
福島県　龍鳳寺　寺島彦宗
福島県　善通寺　宍戸十善
福島県　長泉寺　石月聰明
福島県　福島ＢＳ観光
福島県　昌建寺　秋央文
福島県　石雲寺内　葉貫成悟
福島県　隣松院　熊倉光瑞
福島県　天徳寺　細川正善
福島県　長照寺　楠俊道
福島県　安穏寺　黒金義範
東京都　俊朝寺
東京都　菅原研州
東京都　田中良昭
東京都　慈眼寺　桜井英幸
東京都　石夢工房
東京都　泉岳寺
東京都　冨田隆元
東京都　福壽院　野口弘龍
東京都　玉宗寺　続道雄
東京都　永見寺
東京都　喜運寺　磯貝昌隆
東京都　萬福寺　垣内善勝
東京都　善徳寺
東京都　土田由美子
東京都　桐ヶ谷寺　黒田純夫
東京都　瑞圓寺　木谷雅樹
東京都　善養院
東京都　福昌寺
東京都　勝興寺　吉川弘眼
東京都　龍門寺
東京都　宗参寺　西沢宏道
東京都　龍昌寺　岡本荘一
東京都　宗清寺　飯島尚之
東京都　寶昌寺　秦慧孝
東京都　観泉寺　田中法生
東京都　長泉寺　福嶋幸隆
東京都　佐藤昭次郎
東京都　祥雲寺　西沢応人
東京都　オーシャントラベル
東京都　全昌院　安達良元
東京都　松月院
東京都　寶光寺　八坂良秀
東京都　大泉寺　久保井恭彦
東京都　蓮生寺　鬼頭叙親
東京都　東照寺　宇田照彦
東京都　宗保院内　鬼頭広安
東京都　高西寺　関岡俊二
神奈川県　全竜寺　柳周峰
神奈川県　東泉寺
神奈川県　東林寺　瀧田光久
神奈川県　東漸寺　倉岡弘叔
神奈川県　梅宗寺内　舘盛寛行
神奈川県　横山信吉
神奈川県　中野東禅
神奈川県　成願寺
神奈川県　西有寺　横山敏明
神奈川県　興禅寺　市川智彬
神奈川県　貞昌院　亀野哲也
神奈川県　西福寺
神奈川県　随流院
神奈川県　岩本英男
神奈川県　永明寺　石田征史
神奈川県　正翁寺　篁保雄
神奈川県　大船観音寺
神奈川県　黙仙寺
神奈川県　龍宝寺　梅田良光
神奈川県　鬼塚敦
神奈川県　宗久寺　乾宗俊
神奈川県　浄心寺　栃堀真英
神奈川県　慶林寺
神奈川県　珠泉院
神奈川県　吉祥院　尖秀雄
神奈川県　泉秋寺　鳥澤俊寛
千葉県　宗胤寺　児玉重夫
千葉県　海蔵寺
千葉県　観音寺　関光禅
千葉県　長興院　宮下陽祐
千葉県　海竜寺　大山陽堂
千葉県　瑞岩寺　伊藤仁志
茨城県　鏡徳寺　山田栄一
茨城県　龍泉院　北条正興
茨城県　牛久保真一
栃木県　光真寺　黒田俊雄
埼玉県　東光寺
埼玉県　円通寺　小泉悟道
埼玉県　岩松寺
埼玉県　建福寺　安野正樹
埼玉県　大仙寺　一適隆信
埼玉県　東昌寺
埼玉県　東竹院　岸世一
埼玉県　集福寺　松本文雄
埼玉県　興徳寺　福島伸悦
埼玉県　嶺雲寺　廣田俊和
埼玉県　広徳院　高橋秀雄
埼玉県　宝持寺
埼玉県　昌福寺　荒井禮一
埼玉県　普済寺　岡部雅明
群馬県　長楽寺　峯岸正典
群馬県　昌雲寺
群馬県　祥雲寺
群馬県　宗泉寺　柴山輝行
長野県　観音寺　藤沢好文
長野県　桃源院　山本健善
長野県　苔翁寺　原山浩昭
長野県　広沢寺　小笠原隆元
福井県　つぼた書店
福井県　洞雲寺　斎藤賢隆
福井県　宝慶寺
福井県　宗生寺　石塚良光
石川県　總持寺祖院
富山県　自得寺　松本誠諦
富山県　明禅寺　佐藤博道
新潟県　新潟専門尼僧堂
新潟県　大栄寺
新潟県　佐藤のり
新潟県　祇園寺　冨井清孝
新潟県　興源寺　田宮黎友
新潟県　興源寺　田宮隆児
静岡県　宗徳院　山崎季晟
静岡県　養雲寺
静岡県　永明寺　加藤孝正
静岡県　先照寺
静岡県　延命寺
静岡県　元長寺
静岡県　洗耳寺　長田敬道
静岡県　大慈悲院　野原央全
静岡県　一乗寺　丹羽義裕
静岡県　冷泉寺
静岡県　林叟院　鈴木包一
静岡県　貞善院　木南広峰
静岡県　信香院
静岡県　成道寺
静岡県　洞雲寺　糸柳格順
静岡県　瑞雲寺　平野克史
静岡県　大昌寺　青島孝宗
静岡県　隨縁寺
静岡県　栄林寺　櫻井孝順
静岡県　高林寺　猪俣正孝
静岡県　満願寺　岩田弘之
静岡県　西光寺　鈴木昭一
静岡県　伝心寺　井上正憲
愛知県　慈光院内　戸田規子
愛知県　龍潭寺
愛知県　春江院　宮田春光
愛知県　長松院　篠田一法
愛知県　大光院内　田中俊光
愛知県　愛知学院大学
愛知県　神蔵寺　柴田隆全
愛知県　永沢寺　岡島博司
愛知県　天徳寺　加納博人
愛知県　宝珠寺　永井成典
愛知県　霊岩寺　川橋範子
愛知県　青原寺　杉原良爾
愛知県　宝泉寺　江川辰三
岐阜県　正宗寺　原田道一
三重県　長楽寺
滋賀県　正伝寺　北野良昭
大阪府　妙壽寺　栖川隆道
京都府　松本屋　薮下敏也
京都府　宗仙寺　細川浩代
京都府　正誓寺　山本現雄
京都府　祥雲寺　中小路冏道
鳥取県　大岳院　中村見自
島根県　松源寺　佐瀬道淳
岡山県　成興寺　小倉玄照
山口県　興元寺　金子清学
山口県　自住寺　大庭諦道
山口県　華厳寺　磯部誠司
愛媛県　法竜寺　仁田喜潤
佐賀県　本光寺　小島宗光
熊本県　聖護寺

■ 創立15周年特別募金納入者ご芳名

2008/4/20 ～ 2008/7/31
（順不同・敬称略）

岩手県　清水寺　髙田三雄
秋田県　自性院　鈴木道雄
秋田県　歓喜寺　堀口良允
秋田県　天竜寺　八島国雄
秋田県　大川寺　棟方宣之
宮城県　功岳寺　関弘爾
宮城県　玄光庵
宮城県　秀林寺
宮城県　東北福祉大学
宮城県　秀麓齋　長澤信幸
宮城県　洞雲寺　千田幹雄
宮城県　大満寺内　佐藤透光
宮城県　洞林寺　吉田俊英
宮城県　耕田寺　酒井正智
宮城県　城国寺　菅原英州
宮城県　洞昌寺内　奥野秀典
宮城県　天雄寺
山形県　宗伝寺　蓮池泰乗
山形県　般若寺　藤川享胤
山形県　盤昌寺　大法良典
山形県　見竜寺　池田好雄
山形県　延命寺　宮崎拡行
山形県　宝泉寺　采川道昭
福島県　安禅寺　高山正勝
福島県　昌源寺　立花純孝
福島県　円通寺　吉岡棟憲
福島県　龍鳳寺　寺島彦宗
福島県　善通寺　宍戸十善

会費納入者・創立15周年特別募金納入者・塔婆供養で植林支援協賛者・賛助金納入者名簿

福島県	長泉寺	石月聰明
福島県	昌建寺	秋央文
福島県	石雲寺内	葉貫成悟
福島県	天徳寺	細川正善
東京都		菅原研州
東京都		田中良昭
東京都	慈眼寺	桜井英幸
東京都	石夢工房	
東京都	福壽院	野口弘龍
東京都	善徳寺	
東京都	瑞圓寺	木谷雅樹
東京都	豪徳寺	粕川鐵禅
東京都	福昌寺	
東京都	宗参寺	西沢宏道
東京都	宗清寺	飯島尚之
東京都	長泉寺	福嶋幸隆
東京都		佐藤昭次郎
東京都	祥雲寺	西沢応人
東京都	オーシャントラベル	
東京都	松月院	
東京都	寶光寺	八坂良秀
東京都	蓮生寺	鬼頭叙親
東京都	東照寺	宇田照彦
東京都	高西寺	関岡俊二
神奈川県	全竜寺	柳周峰
神奈川県	東泉寺	
神奈川県	宗興寺	中野重哉
神奈川県		横山信吉
神奈川県	成願寺	
神奈川県	興禅寺	市川智彬
神奈川県	貞昌院	亀野哲也
神奈川県	西福寺	
神奈川県	倫勝寺	馬場義実
神奈川県	永明寺	石田征史
神奈川県	正翁寺	篁保雄
神奈川県	大船観音寺	
神奈川県	龍宝寺	梅田良光
神奈川県		鬼塚敦
神奈川県	宗久寺	乾宗俊
神奈川県	浄心寺	栃堀真英
神奈川県	珠泉院	
神奈川県	吉祥院	尖秀雄
神奈川県	泉秋寺	鳥澤俊寛
千葉県	宗胤寺	児玉重夫
千葉県	海蔵寺	
千葉県	観音寺	関光禅
千葉県	長興院	宮下陽祐
千葉県	海竜寺	大山陽堂
千葉県	瑞岩寺	伊藤仁志
茨城県	鏡徳寺	山田栄一
茨城県	龍泉院	北条正興
栃木県	光真寺	黒田俊雄
埼玉県	東光寺	
埼玉県	興禅院	早船元峰
埼玉県	円通寺	小泉悟道
埼玉県	浄山寺	石井知章
埼玉県	岩松寺	
埼玉県	建福寺	安野正樹
埼玉県	大仙寺	一適隆信
埼玉県	興徳寺	福島伸悦
埼玉県	宝持寺	
埼玉県	普済寺	岡部雅明
群馬県	長楽寺	峯岸正典
群馬県	宗泉寺	柴山輝行
新潟県	大栄寺	
新潟県	曹洞宗新潟県第２宗務所	
新潟県	祇園寺	冨井清孝
新潟県	興源寺	田宮黎友
新潟県	興源寺	田宮隆児
福井県	つぼた書店	
福井県	洞雲寺	斎藤賢隆
福井県	御誕生寺	板橋興宗
石川県	總持寺祖院	
富山県	自得寺	松本誠諦
長野県	桃源院	山本健善
長野県	広沢寺	小笠原隆元
静岡県	宗徳院	山崎季晟
静岡県	永明寺	加藤孝正
静岡県	元長寺	
静岡県	洗耳寺	長田敬道
静岡県	一乗寺	丹羽義裕
静岡県	林叟院	鈴木包一
静岡県	成道寺	
静岡県	洞雲寺	糸柳格順
静岡県	隨縁寺	
静岡県	満願寺	岩田弘之
静岡県	西光寺	鈴木昭一
愛知県	慈光院内	戸田規子
愛知県	龍潭寺	
愛知県	春江院	宮田春光
愛知県	長松院	篠田一法
愛知県	大光院内	田中俊光
愛知県	愛知学院大学	
愛知県	神蔵寺	柴田隆全
愛知県	永沢寺	岡島博司
愛知県	天徳寺	加納博人
愛知県	霊岩寺	川橋範子
愛知県	青原寺	杉原良爾
愛知県	宝泉寺	江川辰三
岐阜県	正宗寺	原田道一
滋賀県	正伝寺	北野良昭
京都府	宗仙寺	細川浩代
京都府	正誓寺	山本現雄
京都府	祥雲寺	中小路冏道
大阪府	妙壽寺	栖川隆道

■ 塔婆供養で植林支援協賛者ご芳名

2008/4/20 ～ 2008/7/31

（順不同・敬称略）

73件　苗木 18,436本分

北海道	長福寺	長尾龍心
秋田県	歓喜寺	堀口良允
秋田県	大川寺	棟方宣之
宮城県	秀林寺	
宮城県	秀麓齋	長澤信幸
宮城県	洞雲寺	千田幹雄
宮城県	大満寺内	佐藤透光
宮城県	耕田寺	酒井正智
宮城県	城国寺	菅原英州
宮城県	天雄寺	
山形県	般若寺	藤川享胤
山形県	盤昌寺	大法良典
山形県	見竜寺	池田好雄
山形県	延命寺	宮崎拡行
福島県	安禅寺	高山正勝
福島県	善通寺	宍戸十善
福島県	長泉寺	石月聰明
福島県	昌建寺	秋央文
福島県	石雲寺内	葉貫成悟
福島県	天徳寺	細川正善
東京都	慈眼寺	桜井英幸
東京都	石夢工房	
東京都	瑞圓寺	木谷雅樹
東京都	福昌寺	
東京都	宗清寺	飯島尚之
東京都		佐藤昭次郎
東京都	寶光寺	八坂良秀
東京都	東照寺	宇田照彦
東京都	高西寺	関岡俊二
神奈川県	東泉寺	
神奈川県		横山信吉
神奈川県	成願寺	
神奈川県	貞昌院	亀野哲也
神奈川県	雲林寺	北見秀明
神奈川県	龍宝寺	梅田良光
神奈川県		鬼塚敦
神奈川県	浄心寺	栃堀真英
神奈川県	吉祥院	尖秀雄
千葉県	海蔵寺	
千葉県	観音寺	安本正道
千葉県	観音寺	関光禅
千葉県	長興院	宮下陽祐
千葉県	瑞岩寺	伊藤仁志
茨城県	鏡徳寺	山田栄一
茨城県	龍泉院	北条正興
埼玉県	東光寺	
埼玉県	円通寺	小泉悟道
埼玉県	岩松寺	
埼玉県	大仙寺	一適隆信
埼玉県	東竹院	岸世一
埼玉県	興徳寺	福島伸悦
埼玉県	宝持寺	
埼玉県	普済寺	岡部雅明
群馬県	長楽寺	峯岸正典
福井県	つぼた書店	
福井県	洞雲寺	斎藤賢隆
新潟県	大栄寺	
静岡県	宗徳院	山崎季晟
静岡県	元長寺	
静岡県	洗耳寺	長田敬道
静岡県	成道寺	
静岡県	洞雲寺	糸柳格順
静岡県	大昌寺	青島孝宗
静岡県	隨縁寺	
静岡県	満願寺	岩田弘之
静岡県	西光寺	鈴木昭一
愛知県	慈光院内	戸田規子
愛知県	春江院	宮田春光
愛知県	永沢寺	岡島博司
愛知県	青原寺	杉原良爾
岐阜県	正宗寺	原田道一
京都府	宗仙寺	細川浩代
京都府	祥雲寺	中小路冏道

■ 特別賛助

大本山永平寺様

大本山總持寺様

動　静　報　告

2008年4月1日～ 2008年8月31日まで

４月28日	ＳＺＩ新パンフレット・海外寺院ガイドブック・会報発送作業	事務局
５月９日	役員会	三田
５月19日	キャンドルナイトin大船観音	大船観音寺
６月15日	永平寺三世徹通義介禅師700回御遠忌文化講演会	駒澤大学大講堂
６月16日	總持寺ワークショップ	大本山總持寺
６月19日	ＳＺＩ創立15周年記念シンポジウム	檀信徒会館
６月20日	永平寺ワークショップ	大本山永平寺
６月22日	キャンドルナイトin大船観音	大船観音寺
７月19日	役員会及び国際布教支援金審議会	新宿
７月22日・23日	夏期大学講座運営協力	檀信徒会館
８月10日	編集会議	事務局
８月下旬	会報発送作業	事務局

インターネットにて随時役員会を開催しています。

編　集　後　記

すべてにおいて不慣れでございます。皆様にご心配とお手数をお掛けいたしましたが、多くの方々のお陰で38号を発行させて頂くことが出来ました。ありがとうございました。私自身大変、貴重な経験をさせて頂き、勉強になりました。今後ともご指導下さいますよう、宜しくお願い申し上げます。

黒田　博志　合掌